
科学と魔術と悪名高い生徒会

有坂尚宣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学と魔術と悪名高い生徒会

【Nコード】

N0419Y

【作者名】

有坂尚宣

【あらすじ】

科学都市。そこに住む、主人公が、頭の痛いおっさんや、謎の宗教団体なんかとの戦い？を描いた、生徒会の物語。

または、断絶刀「刹那」と対となる、破絶刀「覇壊」を探し、邪魔するものや、お気に入りの場所を壊す者をぶった切る、『矢野下組』のパートナーのお話・・・。

プロローグ

プロローグ

爆弾が、目の前にあった。

まわりには、誰もいない。

こういうときには、普通、警察とかに連絡すべきだろう。しかし、ここには110番しても、警察はこないだろう。

爆弾のタイマー(?)表示が、後、5分30秒を切った。こういうときには、どうすべきか、生徒手帳には、書いていない。普通の高校生は、こんなものを一生のうちで見つけることさえ不可能だろう。そう、普通ならば・・・

「お、何だこれ？」

思わず、オーバーリアクションをしてしまった。

「どしたん? そんな驚いて。はっ、もしかしてキミがこれ、仕掛けたのかな?」

笑顔で、質問された。しかし、知らない子だ。

「いや、違う違う。俺じゃない!」

「犯人はみんなそう言うんだよ?。じゃなきゃミステリーが始まらない。犯人が、最初から自首する小説ほど面白くないものはないよ」
「それは、ミステリーとは言わないんじゃない。ってそこじゃない、ほんとにやってないって」

「そうなの? ミステリー小説あまり読まないから、わかんないんだよね」

「じゃあ言うなよ!」

栗色の髪を指でいじりながら、詰まんなそうな顔で、爆弾の方を見ている少女はおそらく、いや間違はなく同じ高校に通っている生徒だろう。ーなんたってクラスの女子と同じ制服を着ているのだからー同じ1年生だろうか。

「ところでこの爆弾、こんなところで爆発させるの？」

不意に思考を遮断された。こんなところだからこそ、爆発させていいんじゃないのか？

「だって、この爆弾、結構大きいじゃん。爆発したら、私のお気に入りの場所までなくなっちゃう」

確かにここは、人通りが少なく、静かなため友達がいらない子や、頭の痛い子などなど、いろいろと、問題のある生徒が、集まるところだ。もしかして、この子も、頭の痛い子なんじゃ……。

「それよりも、場所が問題だ」

「うおっ」

いつの間にか、もう一人増えていた。長い黒髪で、美人という形容詞が似合う人だ。しかも、同じ問題点を言ってる。

「おまえが仕掛けたのか。見た目と違って、頭いいんだな」

「誰だよ！初めて会った人への、第一声が、それって、だいぶ失礼だよな！」

「しかし、これでは、ちょっとな、やりすぎじゃないのか？」

「スルーかよ！だいたい、これ仕掛けたの、俺じゃねえーし」

「この学校を消す、ということには、私は賛成だが、さすがにこれでは、逃げ場がない。もしかして、告白した相手にでもふられて、やけくそになり、爆弾を仕掛け、その子ともども、一緒に心中する気だったのか！それは、かわいそうだったな。だが、私をまきこまないでほしい。できれば、私は長生きしたいからな」

「ふられてねーよ！告白してすらないのにふられるわけがない！」

「ということは、好きな相手はいる、ということだな」

「！！」

「あー。あのー私忘れられてません？」

「あっ」

「なにっ、その『あっ』って、ほんとに忘れてたの？」

「で、何が言いたいのだ、貴様は。会話を割り込んでくるほど重要な話なんだろうな」

なぜか、腰に日本刀を帯刀している美少女は、手を、刀に伸ばしながら言った。

「わー、ストップ、ストップ！この国には、銃刀法っていう法律があるんだから、切るなら、私以外にして！」

すると、今度は、自分に向けられた。

「いや、なんで俺に向ける！あっちだろ！」

「もー、そんなこといって・・・」

「変なこと言うな！わー、ごめんなさい」

「問答無用！この爆弾ともども切ってくれる！」

「そういえば、爆弾のタイマー、あと20秒きってるよ？」

「！」

「！」

みんなが、一斉に、タイマーを見た。18、17、16。やばい、逃げなきゃ。全力で走りだそうとしたところを捕まえられた。

「貴様、逃げる気か！」

「逃げなきゃやばいって、説明しないと分からないのか！爆弾のタイマーが、10秒をきった。」

「ところで、この爆弾どうする？もうあまり時間無いけど・・・」
3、2、1。

その瞬間、視界が白く染まった。

プロローグ（後書き）

はじめまして。これが初めての作品です。更新は、遅いかもしれませんが、
せんがよろしくお願いします。

自己紹介？（プロローグでやれよ！）主人公の名前は、杉田守です！

突然だが、普通の高校生が28億円という大金を目の前にする機会があるだろうか。普通なら一生見る機会もなく死んでいく人たちの方が多いいだろう。だが、目の前に確かに存在する。それを何に使うかと言うと・・・

「やっぱこれ、もらっちゃおうよ」

生徒会室の中で、悪だくみを考える鶉神美月くうずらかみ みつきは、さっそく一番上に乗っけてある100万円の札束を手にする。

「殺されたいのか？貴様は、」

何かと物騒な雰囲気腰に帯刀している黒髪で美人な、黒澤朱音くろさわ あかねは、刀を抜きながら言った。

「あゝ、ストップストップ、とりあえずこれは、この学校の一年間の運営費だから勝手に取らないこと。あと、朱音は銃刀法を意識すること」

生徒会長のイスに座り、足を机に投げ出している一見、不真面目そうな少女、如月香奈枝くささらぎ かなえが言った。

「学校の運営費が28億って何に使うつもりで集めたんだ？」

とりあえず、会話に介入した俺。

「・・・おもに、キミの爆弾による校舎破壊の修繕費かな？」

「だから、俺は犯人じゃねえよ。」

「ま、それは置いといて。」

「スルーかよ！」

そのまま無視する形で香奈枝は、机の上にあった箱の中から一通の手紙を取り出した。

「えっと、一緒に届いた、手紙には、『息子をよろしくお願いします。科学都市統括理事会理事長 杉田美鈴』って書いてあるわ。あと、『これだけあげるのだから、少し、お願いを聞いてね』と、

書いてあるわ」

「あの人は、何をやってるんだ・・・」

「良い親御さんじゃない、おかげで、私の懐も当分は、安心だね！」

「公私混合とは、けしからん」

「でもって、問題が、これなんだけど・・・」

そう香奈枝が言うと、一枚の紙を見してきた。

「なんだこれ？」

「まず内容を読んでからいって」

「えーっと、『4時29分37秒に、科学都市付属第一高等学校の校庭に、自称、最強の魔術師が現れるから、とりあえず無力化しといて』、って書いてあるけど、まず、なんで4時29分37秒なんだろう？」

「美月さん？重要なところは、そこじゃないと思うけど・・・」

「えっ、時間って、世の中じゃ一番重要視されるところじゃないの？」

「いや、そういう意味じゃなくて、やっぱ、自称最強の魔術師ってところ、ここが一番重要だろ！」

「守君、時間を守らない男の子は嫌われるよ？」

「そこじゃない！」

「ほら、香奈枝だって言ってるじゃん」

「確かに、私は時間を重要視する」

「朱音だって言ってるじゃん」

「・・・俺だけなのか？自称最強の魔術師が気になる人は・・・」

「そう落ち込むな、ひととずれていようが、問題は、顔と容姿だ。」

「なんか違う気がする！それって、暗に俺に向かっての忠告だろ！」

「でさー、校舎の修繕費っていくらぐらいかかるの？私たちで、残ったお金貰っちゃおうよ」

「なんでこう俺はスルーされるかな・・・」

がっくりとうなだれる守を空気のごとく無視する生徒会メンバー。
「えっと、とりあえず見積もりしたけど、修繕費が約八億七千万円、

学校運営費が二億六千万円、あ、これは各部活の部費も入ってるから。もちろん生徒会が二億五千万円ほど着服するけど。」

「って、何言ってるんだ！着服すること前提で話進めてんじゃないよ！」

「なんでよ、だいたい毎年してるんじゃない？」

「・・・この学校の生徒会は腐ってる。」

「おもに杉田守がな」

「こういときだけ会話に介入してくるんだ、朱音は・・・」

「そこ！なんで俺だけなんだ？どっちかっていうと香奈枝と美月だろう！」

「何を言っている。こういうときには、伝統を重んじるものだぞ、着服という名の伝統を！」

「駄目だ、この人も・・・」

そもそも、着服などと言っているが去年は、実際には学園地区合同文化祭での各高校での模擬店、歌手を呼んでの野外コンサートなど、いろいろと出費がかさむ時にお金が足りなくなると困るから、生徒会が一時的に管理していて（それでも数百万程度）ためているのだが、今年の生徒会は、初めっから自分たちのためのお金を着服しようとしている。しかも億単位のお金を。

「で、結局いくら使えるわけ？おもに私が。」

「最低だな、おまえ。」

「何が最低よ！私は、他のだれよりも強くなるためにハイスペックなPCがほしいのよ！」

「ネットゲのためかよ！」

もともと、美月がネットゲームにはまっていたことは知っていたが、さすがに学校の資金を使ってまでになるとは。この前、美月の母が娘がひきこもりになった、と嘆いていた理由がわかった気がした。

「いいじゃない、人の勝手でしょ！」

「その言葉は、自分のお金を使おうとしているときに言おうか」

「何よ、校長だって、自分の愛人に貢いでたのよ！学校の資金で」「犯罪だ！すぐ警察に行こう！」

「確かに悪いことだ。とりあえず、脅しに行こう」

「何言ってるんだよ！」

「いや、相手の弱みを握ったら、脅してお金を巻き上げる権利が発生するのだろうか？」

「ここにも犯罪者いた！」

「んー、しょうがない、とりあえず守の口をふさごうよ。ミステリ―小説的な感じで」

「あの、それって俺死んでませんか？」

「だって、協力しないんだもん！やっぱり殺してよ、朱音」

「承知した。」

そう言うとき朱音は腰の刀を取り出し切りかかった。

「ちょ、おま、」

刀が振り下ろされる。命の危機を感じた。わが人生一片どころじゃないほどの悔いあり。

覚悟をしていた守だったが、いつまでたっても自分が切られた感覚がない。もしかして、あの刀は、来れたことにも気付かずに死んでしまう刀だったのでは？そう思うと、少し楽になった。ああ、近くで香奈枝の声が聞こえる・・・近くで？

「起きろー、何やってんだか」

香奈枝がため息をつくとき、美月が泣きそうな顔で言った。

「う、うー、なんで守る死んじやうのさ・・・」

「！死んでいるのか、こやつは！」

「えっ、だって、ミステリー小説じゃ、ここで、『殺すつもりはなかったんです』とか言つとけば、罪が軽くなるって書いてあったよ？」

「前提が間違っているわよ、あんたたち。まず最初に朱音の刀は血が付いていない、つまり証拠がないってことよ。次に、守は自殺し

た。こういうことにしちゃえば、警察だって私たちのせいじゃないってことは、信用してくれるわ。さあ、自殺に見せかけるように、準備しましょ！」

「ちよーとまったー。」

「「うわっ」「」」

いきなり起き上った守に驚く3人。

「おれは死んでないぞ！勝手に殺すな」

「ちっ」

「今、ちっ、って言った。ふざけんな！なんでこんなところで死ななきゃならない！」

「あゝあ、自殺に見せかける自信あったのに」

「そこ！物騒な言うなっ！」

いろいろと物騒な生徒会だった。

自己紹介？（プロローグでやれよ！）主人公の名前は、杉田守です！（後書き）

第一章です。これは、ストックなので早く投稿しています。

問題の自称最強の魔術師とは？

そうこう言い合っているうちに問題の時刻が来てしまった。

「もう時間だね。来てるかなあ〜」

美月が校庭の方を見た。

「あ、誰かいる。」

「怪しい身なりのやつだな。よし、殺してしまおう」

「うん、そうだね」

「刀を出すな！香奈枝もその気にさせるな」

香奈枝が、えー詰まんない〜、などと言っているが、とりあえずほっておこう。しかし、校庭に不審者（自称最強の魔術師）が現れたのは不思議だ。この高校は、科学都市特別法に従って、建てられているから、普通なら、この学校の生徒や、先生以外はどうかやっても入れないほどのセキュリティがあるはずなのだ。もし、そのセキュリティを突破してきたのなら、只者ではないような気がしないでもないが……。

「あ、警備員が来たよ」

「ほんとだ、やっぱり、ただの不審者だったのかしら？」

科学都市特別法では、基本的に情報重視で漏洩などを防ぐため侵入者に対しては、どんなことをしても罪には、問われない。数年前に、北朝鮮の諜報員が、統括理事会の管理下にある、コンピュータにハッキングをしただけで、科学都市は大陸間弾道ミサイルを北朝鮮の諜報機関すべてに向けて発射し、戦争になりかけたこともあったほどだ。（どんだけ、大げさに対応してるんだ、母さんは、）

「なんか、暴れてるよ」

「普通に縛られて、連れてかれてるな」

「なんか、しょぼいなあー」

「殺せなかった」

一人だけ、物騒なことを言っているが、皆、興味はもう、例の大

金に戻ってしまっている。だが、次の瞬間信じられなことがあった。

「あれはなんだ？」

不審者の体が、光ったかと思うと、突然爆発した。校庭には、帰宅途中の生徒が、数名巻き込まれた。

「なっ、何？」

いきなりの爆発音に、生徒会の面々が、窓際に駆け寄る。

「爆発しちゃったよ」

そこに、携帯がかかってきた。母からだ。

『もしもし？ 守、手遅れだったかな？ 最強の魔術師さんが怒っちゃったみたいね。とりあえず、私の私設部隊と強い女の子一人送ったから、あなたたちは逃げなさい』

「そう言われても、みんなもう、校庭に行っちゃた・・・」

『あちゃー、とりあえず、生き残って・・・』

そう言うのと、一方的に切られてしまった。

「あゝあ、あのおじさん、とうとう、ここまで来ちゃった。」

いきなり、後ろから声が聞こえ、あわてて振り返ると、一人の少女が、立っていた。

「杉田守さんですね。私は、美鈴さんの頼みで、ここに来たんですが、とりあえず、あのおじさんに近づかないでください。」

「えっと、おじさんって、あの自称最強の魔術師さんのことかな？」

「あ、今はそう、なのっているんですね。前まで、神の使いだ、とか叫んでいましたけど・・・」

「それで、キミは誰なのかな？」

「・・・さっき言いましたよね。私は、科学都市統括理事会理事長直轄極秘研究事項管理局特殊防衛部隊第二十七師団所属の美園桜くみその さくら>です。今回は、美鈴さんの指示で、例のおじさんを、無力化しに来ました。分かりましたか？ もういいませんよ」

「絶対さっきそんな説明してなかったよな！ そんな長ったらしい肩がき良く嘯まずに言えたな！」

「まだわからないんですか？ 検体識別コードは、『強い女の子』だ
って言ってるじゃないですか。」

「言ってるじゃない！ 自分で言ったことぐらい覚えとけよ！」

強い女の子って識別コードだったんだ。それに、検体って言って
たけど、なんかの研究の被験者なのか？

「では、さっそく」

そう言うと、窓を開け、引っ張ってきたスーツケースを開け、中
から長くて黒いものを取り出した。

「この部屋から出て行って下さい。鼓膜破れますよ？」

美園は、取り出した部品を組み立て、長いスナイパーライフルを
組み立てていた。あまり、銃のことに詳しくはないが、素人目に見
てもその長さが異常だった。ゆうに長机の縦の長さを超えており、
窓からものすごい長さの銃身が突出している。

「早く出て行って下さい。」

いらだちを含めたような声で言われたので、従った。

「わ、分かった。」

走り気味で生徒会室を出た。とりあえず、校庭に行こうかな、と
思っただけ階段を駆け降りる途中、ものすごい爆発音が聞こえた。

「な、何だ？」

とりあえず、一階まで、三段飛ばしで駆け降りる。

一階の入り口は、砂煙が舞っていた。目を凝らし、ようやく香奈
枝を視認することができた。

「・・・？」

香奈枝は、よく見ると、何かを持っていた。そしてこちらに走っ
てくる。近づくにつれ徐々に明らかとなる物体。それは、漆黒の銃
だった。

「守君、早く逃げた方がいいわ！ あのおじさん、かなり危ない人よ
！」

「・・・それはそうと、なんでお前、銃っぽいやつ持ってるんだ？」
「もう、そんなことはいいから、はやくにげましょ！」

「朱音と美月は？一体どこにいるんだ」

そう言ったところで、香奈枝は急に暗い顔をした。

「今は、動けないみたいなの」

そう言って、守の手を引いて、職員室前まで来た。

「携帯持ってる？私の壊れたから貸してくれない？」

「ああ、でもなんで必要なんだ？」

携帯を受け取りつつ、香奈枝は「大したことじゃないよ」と言った。

★☆☆☆☆

科学都市の地下26層部にあるサイバーセキュリティ監視局は、謎のハッカーによるハッキングの対策に追われていた。

「局長、システムの最深部に侵入されました。もうこっちからのアクセス遮断は、不可能です。」

それを聞くと、局長である神埼巧くかんざき たくみ>は一言。

「は、またか、」

本日二回目のハッキングである。元ハッカーぞろいの精鋭たちを集めた部隊でも全く歯が立たなかった。しかも今度は、システムの最深部を乗っ取られたため、実質例のハッカーがこの都市を制圧したも同然だ。

「とりあえず、統括理事会に『フェーズ4』の勧告をしとけ」

目の前にいた、眼鏡をかけやせ細った局員にそう言った。

問題の自称最強の魔術師とは？（後書き）

どうも。これで、ストックが切れました・・・。

こ、告白ですか？

「よし、いけた！」

目の前で、真剣な顔でケータイをいじっている香奈枝に守は、一言も声をかけることができなかった。すっかり、暇になってしまった守は、朱音と美月がどこに行ったのか気になったので、探しに行こうとしたら、いきなり、腕を掴まれた。

「どこに行くの？」

「え、えっと、朱音と美月を探しに・・・」

「あの子たちなら真っ先に逃げたわよ。全く、生徒会長を置いて逃げるなんて」

普通逃げるだろう、と言いかけたところで、校庭の方から爆発音が聞こえた。

「またか！」

「違うわよ。それより、何なの？ あんた、佐藤さんのこと好きなの？」

香奈枝がいきなりそんな話題を振ってきたので思わず身構えてしまう。

「なんでそんなこといきなり聞くんだよ」

「あんたの携帯、その子のメールの割合が、私より高いからよ！」
露骨に不機嫌になる香奈枝。その理由がわからない守。

「何勝手にみてんだよ。人の携帯！」

「あっ、もしかして、凶星？」

「違う！ 春の合同体育祭の打ち合わせで、おまえが俺を委員長にした。それで、副委員長が佐藤だから必然的にメールの割合が高くなるだろ！」

「ふーん、どうだか」

これ以上何を言っても無駄だと思い反論をやめる。しばらくの沈黙、そして爆発音。

「さっきから一体何なんだ？」

すでに、生徒たちは避難しているだろうから大丈夫だろうが、これ以上にひどい爆発が起これると、自分たちが危ない。

「ほら、行くよ」

香奈枝にそう言われ、手をひかれる。今気付いたが、香奈枝と手をつないで走っている。女の子と手をつなぐイベントが少ない守にとって、うれしいのかうれしくないのか微妙なイベントが発生した。

「な、なあ香奈枝？」

「ん？何？」

露骨に不機嫌な声で返してくる。

「おまえって、あまりこういうこと気にしないのか？」

香奈枝が、へ？、という顔で振り返り、俺の線の先を見る。そうすると、顔を赤くして。

「この変態！」

「なんでだよ！」

すばやく、手を振りほどかれる。

「おまえが先に掴んだんだろ！」

「黙って！この変態！」

そう言う一人で、走って行ってしまった。

「どうしよう」

爆発音が響く職員室前で、途方に暮れる一人の男がいた。

★☆☆☆☆

「やってくれたな！」

神埼は、自分の机のモニターを掴み、今にも割れそうな力で、揺らしていた。

「局長」

「なんだ」

眼鏡をかけた気弱そうな局員が泣きそうな顔になる。それでも職

務を全うするために。

「あ、あのですね、実は、第一高校の校庭にある人物がいたんです」「人が？」

「はい、えっと、」

ファイルを忙しげにめくる局員。

「あ、えっと、その人物は、非主流的科学《フリンジサイエンス》研究地区での実験台で、検体番号01929だそうです。」

「千番台か。それなら、ほっとくのもありか。」

「は、えっ、ほっとくんですか？この非常事態を」

「構わん、今日は、もうあがっていいぞ。」

そんな神崎を不審に思いながらも局員は、局長室を出た。

「まさか、あの生き残りとは、殺せれば俺の手柄にできるじゃないか」

局長室に笑い声が響いた。

★☆☆☆☆

「おい、香奈枝、どこだー」

大声で廊下を歩きながら叫ぶ一人の影があった。

「変態」

小さい声だったが、守は聞き逃さずに、声のした方に向かった。

「黙れ、俺の評判が悪くなる。」

「何よ、変態のくせに」

「だから、おまえが握ってきたんだろうが」

「それじゃない、あんたの携帯の中身、すべて見たわよ！」

そう言うと、職員用のタブレット端末を見せてきた。

「これであんたの携帯の中身と寮のPC見たんだから！この変態！」

「どうやって見たかは知らないが、すいませんでした。許して下さい」

即効土下座をした。守をみて、さらに香奈枝が追い打ちをかける。

「びしょぬれナース24時」

「すいませんでした」

さらに深々と土下座をする。

「寮の監視カメラを見たけど、あんた、かなりのロリコンね！」

「は？」

いきなり身に覚えのないことを言われた。

「なんでだよ。俺は、年上好きだぞ？」

「何あんたの性癖バラしてんのよ！この変態！」

自分の失言に気づいた守は、さらに、どげさを繰り返す。

「なに？この、『小学生のスクール水着天国』って、完全なロリコンじゃない！」

「いや、断じて俺じゃない。そんなもの俺のコレクションの中には断じて入ってないぞ！」

「あんたのコレクションで、寮にあるの？」

「ああ」

「燃やしてやるもん！あんたの寮ごと！」

「やめろ！その年で放火魔になるつもりか！」

本気で、放火しそうなので止めておく。しかし、なぜ家のPCの内容まで知っているんだ。ちゃんとパスワードもかけておいたのに・・・。

「ちゃんと話を聞いてくれ！俺は、断じてロリコンじゃない。それに、俺の知り合いでロリコンと言ったら、西村ぐらいしかいない！」

「誰よそれ、騙されないんだから！」

「実在してるって！3年A組の西村真冴也、それ以外いない！」

「じゃあなんであんたの寮にあんなDVDがあんのよ！」

「しらねーよ、西村に聞け！」

「じゃあ、ロリコンじゃないって証明してくれたら、寮を燃やすのはやめてあげる」

「証明ってどうやればいいんだよ。」

「んー、じゃあ、今ここで、自分の好きな人言うこと」

「えっ、マジで？」

「マジで」

「ほんとに？」

「ほんとに」

非常に困った状況になってしまった。どうすればこの場を切り抜けられるだろう。適当に誰かを言えば、こいつにあることないこと言いふらされそうだし。よし、ここは、とりあえず、強硬手段として、香奈枝が好きだということにしよう。

「香奈枝」

「へ？」

「俺が好きな人だよ。香奈枝、おまえが好きなんだよ」

言ってやった。これで、ふられて終わりだ。こいつも自分のことだから、言いふらさないだろうし、我ながら完璧な作戦だ。

「え、えっと、それは、告白ととらえていいのかな？」

「もちろん」

自信満々に言う。早くしろ、自分の完璧さに吹き出しそうなのを必死でこらえる。

「えっと、うん、いいよ、付き合ってあげる」

「そうか・・・って、ええっ！お、俺と付き合うって？」

「何よ、自分で告白したくせに」

顔を赤面させながら、言う香奈枝に、ほんとのことを言った時の恐怖が浮かぶ。

「そ、その、ありがとな」

「・・・どういたしまして？」

会話が續かない。どうしよう。

絶体絶命な状況に立たされた守だった。

騒ぎ

科学都市研究地区非主流的科学《フリンジサイエンス》研究地区の粒子加速施設では、ちょっとした騒ぎが起こっていた。

「早く、こいつを処理しろ！」

若い白衣を着た青年が言った。

「し、しかし、ここまで巨大化した生物は、ここにある武器では、倒すことはできません」

放射能防護服みたいなものすごくごつい武装をした隊員が言った。

「はああ、なんでだよ！ここは、いろんな先代の摩訶不思議的な武器がそろってんだろが！」

「そ、そう言われましても・・・」

外側から顔は見えないが、明らかに困っている様子が分かる。

「もういい、俺が始末する。」

そう言うのと、縦に開いたものすごく巨大な穴の上にある橋の中央に立った。

「この手に、荷電粒子砲を、」

一言。しかし、その瞬間、さも前から手に持っていたように巨大な銃のような物体が出現した。

「粒子射出準備、目標物体を確認」

そのとき、はるか下にいたはずの巨大生物が、やけに長い腕を伸ばし、橋を掴んだ。

「ちょ、おま、まだ射出準備ちゅ・・・」

白衣の青年の悲鳴とともに、その巨大生物は、橋を握りつぶした。

★☆☆☆☆

「あゝかゝねゝ、これからどうしよう」

現在、駅前の地下ビルの喫茶店にいる二人。逃げ出した後、この

喫茶店に入って注文したはいいが、財布を二人ともかばんの中に入れていたことに気が付き、帰るに帰れない状況なのである。

「香奈枝が電話に出るまで待てばいいのだろう」

「でも、何回かけてもでないし。はっ、もしか、ミステリー小説的な展開で、香奈枝と守が一緒に殺人を犯していたりして！」

「なにっ、そのあと、駆け落ちして、警察の凄腕変人刑事がその二人を捕まえるのか」

「いやいや、そこはやっぱり、その凄腕変態刑事を二人でやつつけて、外国に逃げるんだよ！」

「む、凄腕変人刑事が、凄腕変態刑事に変わったぞ？」

「細かいことは気にしない！それでもって、二人は、海外で幸せに暮らしましたとき、めでたしめでたし」

「・・・それでは、ミステリー小説にならないのでは？」

「だ・か・ら、細かいことは気にしない！あ、もちろん、桃色結合済みね」

「なんだその、桃色結合とは？」

「ええっ、そこ聞いちゃうの？知らないの？」

「知らんな」

「実は、私もよく知らないんだよね。たまたま、目に入ったライトノベルをぱらぱらとめくっていると、その単語が目に入ったんだよねえ」

「貴様、自分が知らない言葉を使っていたのか！」

「ぎゃー、お、落ち着いて、ここいちお公共の場だから！」

騒ぐ二人を白い目で見る他の客と店員。しかし、構わず会話を続ける二人。

「うむ、そうだな。」

「はあ、時々めんどくさいなあ」

「なんか言ったか？」

「いえ、何も」

心の声が外に出ていたのであわてて口をふさぐがもう遅い。

「そうか、貴様は、私のことをそのように思っていたのか」

そう言うのと、立ち上がりそそくさと、店を出ていく。

「えっ、ちょ、ちょっと、待ってよ朱音！」

追いかけてようと立ち上がり、朱音が外に出ていたので、続けて出ようとしたところを、店員に腕を掴まれた。

「お客様、お会計を済ましてでてください」

こめかみに、血管を浮き出させながら、語彙を強めていったので、いまさらながら、自分たちが、無銭飲食をするところだったと思ひなおす。

「す、すみません。えっと、まだ待ち合わせしているんで、待ってます」

そう言うのと、店員は、不審な目で見たが、引きとめられないので、とりあえず、元の席に座った。

「あゝあ、暇だなあゝ」

一人さみしく、座っている少女。助けを求めています。誰か、お金を恵んでください

★★★☆☆

科学都市統括理事会ビルでは、非公式にだが会議が開催されていた。

「ですから、例の失敗作をこの機会に倒そうって言ってるんです！」

防衛関連を主に扱う、中崎直人《なかさき なおと》、常任理事が、発言した。

「なにいったんじゃ、この小童が。この都市が実質制圧されたんじやぞ。実際、わしらの指示が防衛部隊に言っていないじゃないか」

頭は禿げていないが、口だけが悪い、鷲頭弘明《わしず ひろあき》が、発言した。

「駄目ですよ、中崎さん、この堅物と話しても。それより、問題は、例のハッカーが誰なのか、何が目的なのかです」

賢そうな、インテリ系の眼鏡が、非常に似合っていない、藤本旬一郎《ふじもと　じゅんいちろう》が、発言した。

「あ、それなら。例のハッカーの主体は、科学都市付属第一高等学校三年B組の如月香奈枝《きさらぎ　かなえ》です。目的は、おそらく自分の高校の校庭に現れた、失敗作を殺害するためでしょう」

活発そうな青年、秋佐都史《あき　さとし》が発言した。

「ならいーじゃん。じゃあこれで解散。」

二児の母とは思えないほど若く見える実質40代の杉田美鈴《すぎた　みすず》が発言した。

みな、それぞれ、帰り支度をしているところに、一人の全身黒づくめの背が高い人間っぽい人が現れた。

「お待ちください、新たな問題が発生しました。非主流的科学《フリンジサイエンス》研究地区で、巨大生物が出現しました。すでに死者は、50名を超えており、加速進化について研究中だった、串田さとし《くしだ　さとし》も、なくなりました。

「ということで、再集合。クッシーが死んじゃったから、対処方法がほとんどなくなっちゃったから」

「確かに、あの人は、非主流的科学《フリンジサイエンス》研究地区では、いちばんのふる株で、結構友好関係も広かったので、いろいろ、研究品の使い方を知っているでしょうからおしい人材をなくしました」

「ということとは、あの地区にある武器は、登録されている物以外は、使えないってことですね」

「ざんねんじゃの。なんなら、わしがかってにいじってつかってもいいんじゃないが」

「「「やめてください」」」

皆が一斉にいった。それと言うのも、統括理事会で、一番ぼけている鷲頭が勝手に、非主流的科学《フリンジサイエンス》研究地区の未登録品を勝手に使ったせいで、科学都市の研究地区の地表部分の大部分が吹っ飛び、直接的被害だけで総額6兆円を超えるという

とんでもない被害を出した、超問題人なのだ。

「ところで、その生物は、今どこにいるのですか？」

冷静に藤本がきいた。

「はい、現在、研究地区と学園地区を結ぶ連絡橋の第3ブロックを破壊しながら通過したところです。このまま直進すれば、学園地区にも被害が相当でると思われます。」

「じゃあ、とりあえず、非常事態宣言を出して。私は、ハッカーから一時的にシステムを奪還するから、すぐに全部隊を動かせるようにしといて。あと零落の破壊神《レールガン》を起動させるから、施設に居る人たちを口頭で避難させて」

「了解しました。」

そう言うとき、黒づくめは、でていき、美鈴は、大量のホログラムを表示させ、ものすごいスピードでキーボードを打っている。

「美鈴さん、私たちもな・・・」

「うるさい、黙れ」

私たちも何かしようかと聞こうとした秋は、途中で遮られ、何も聞ける雰囲気ではなくなってしまった。

☆☆☆☆

校舎を歩く二人の影。その影は、階段を上り、屋上へでる。

「ねえ、守」

少女が一言。

「な、何？」

ひきつった顔で、答える少年。

「なんでそんな嫌そうな顔するわけ？もしかしてさっきの告白って嘘だったの？」

「え、いや、いやいや、違うそんなわけないじゃん」

そのとき、守の携帯が鳴った。

『あ、守？悪いんだけど、生徒会室にあるお金持ってきてくれない

？私いま駅前の喫茶店にいたんだけど、財布忘れちゃったみたいだから、ね、お願い』

「わかった、なすべく早く行く」

そう言うのと、守は、いまだに断続的に響く爆発音に嫌気をさしながら、携帯をポケットに入れた。

「誰から？」

「美月からだよ。財布なしで喫茶店に入って、出られなくなったそうだ」

「あっそ、」

「ところで、この爆発音ってなんで響いてるんだ？」

「え、知らなかったの？例の強い女の子よ。あんたの携帯の履歴に美鈴さんからのがあったでしょ？」

「じゃあ、あの、ものすごく長いスナイパーライフルの音がこれなのか？」

「そうよ。あのライフルって、美鈴さん特性だから、無駄に威力だけは高いのよ」

「でも、そんなライフル使っているのに一発で仕留められないのか？」

「できないみたい。さっき調べたんだけど、あのおじさん、検体番号01929って言って、千番台って呼ばれる失敗作みたいなの。」

で、その失敗作は、いろいろな能力を持っていて、あのおじさんは、体で反物質を生成できるらしいの」

「反物質を生成？そんなことできるのか？」

「うーん、実際には、かなり大掛かりな施設が必要だけど、相手は、非主流的科学《フリンジサイエンス》研究地区の失敗作だから、その辺の常識は通用しないと思うよ」

「じゃあ、どうやって倒すんだ？断続的に売ってるけど、いつ弾がなくなるか分からんし」

そのとき、香奈枝が持っていた、タブレット端末から音がした。
「なんだろう？」

そう言いながら、香奈枝が操作すると。

『やってくれたわね。香奈枝さん？』

「あ、美鈴さんですか。どうしたんです？」

『どうもこうも、あなた、科学都市の全システムを掌握してるでしよう！さっさとこっちにキーを教えなさい！』

「え、まだ解除されてませんか？じゃあ、さっそく」

そう言うともたいくつかの操作をしたのち。

「終わりわした。とりあえず、そっちで操作できるはずですよ？」

『まったく、迷惑な子ね！ほんと』

「すいませんでした」

『まあいいわ。でも今いる所からは、すぐに離れなさい。』

「分かりました。それでは」

そう言うともたまたいくつかの操作をして、タブレット端末を切った。

「はあ、美鈴さんと話すときって疲れるなあ」

「そのようだな」

「じゃあ行こうか、守っ」

手を握られ、さっきの光景を思い出す。

「そ、その、香奈枝さん？手をつなぐのは・・・」

「良いじゃん、恋人なんだし。」

顔を赤面させながら香奈枝が言った。

願ぎ（後書き）

がんばりました。良ければ、感想を書いてくれると幸いです。

ある研究者の講義

科学都市学園地区、第14学区の大規模ホールに一人の学者が演説をしていた。会場の壇の上には、『佐々木豊《ささき ゆたか》解説、よくわかる陽電子研究』と書いてある。

「陽電子は陽子過多により不安定な原子核の β^+ 壊変により生成されます。もしくは、 1.022 MeV 以上の

エネルギーの電磁波と電磁場の相互作用により対生成されます。また、陽電子は物質内に侵入すると、物

質内の原子の核外電子、特に荷電子、伝導電子と対消滅し、数本の γ 線となります。また、対消滅が起こる

前に準安定状態の電子－陽電子－《ポジトロニウム》を作る場合があり、これは一種の水素様原子、元素記

号は P_s です。電子と陽電子のスピンの反平行な一重項状態をパラポジトロニウム($p-P_s$)といい、スピン

が平行な三重項状態をオルソポジトロニウムといいます。さらに、電子と陽電子の対消滅により放出され

た γ 線のエネルギー分布の観測から、単結晶中の電子の運動量密度分布を求めることができ、これは二光子

消滅の γ 線が本来 511.0 keV であるところ、ドップラー効果によりエネルギーが増減するためである。ま

た、物質中に陽電子が入射してから電子と対消滅するまでの時間スペクトルの時定数を陽電子寿命と呼

び、これを調べることにより物質中の空孔型欠陥等を極めて高感度に調べるができます。これは陽電

子の消滅率が電子密度に依存するためであります。さて、これまでの説明が分からない方は、恥ずかしが

らず、手を挙げてください。」

そう言う、ほぼ全員が手を挙げた。

「はあ、だから嫌なんだ。学生相手に陽電子研究を説明するなんて無謀だとして分からないんだ。」

小さい声で言ったつもりが、マイクに拾われ会場に響いたことに気がついた。

「えっと、すいません。分かった人は、手を上げてください」

すると、皆、手を下げ、誰も手を上げていない。

「え、えっと、じゃあ、まずこれを発見した話から行きましょうか」

そう言うスクリーンに、画像が映し出された。

「おホン。えー、陽電子が仮説として立てられたのは、1928年、ポール・ディラックがディラックの

海という空間にできる穴の形で、初めて正電荷を持つ電子、いわゆる反電子の存在の仮説を立てたのが始

まりです。」

誰も、真剣に聞いている様子がない。おそらく、ここにいる学生たちは、ほとんど強制参加させられたのだろう。こんな学生たちに講義をしても無駄だろうが、報酬は、前払いで貰っているため、後戻りはできない。

「次に、1932年、カール・デイヴィッド・アンダーソンが鉛板を入れた霧箱を用いてそのような性質を持

つ粒子の観測に成功して、プラスの電荷を持っていることから陽電子《positron》と命名しました。ま

た、アンダーソンは、ポジトロンと対にするため、電子の正式な名称をエレクトロンからネガトロン

《negatron》に変更する運動を起こしたが、失敗に終わっています。」

予想通り、誰も聞いていないようだ。

「陽電子の利用としては、医療分野として、ポジトロン断層法を用いたがんの発見などに利用されます。

これは陽電子放出核種でラベルされた生体分子の分布や代謝を、放射能の空間分布やその時間変化を通し

てイメージングする手法です。また、日本ではがん診療への利用のみならず、がん検診としても利用されています。

「ありますが、これには賛否両論があります。」

話が変わったのに気がついた学生が何人いるだろう。ゲームをし始める学生まで出てきた。

「また、材料分野においては、半導体の空孔型欠陥の検知、つまり、密度や種類の測定や、ポリマーの自

由体積の測定などにも利用できることが知られていますが、主に研究室レベルで用いられており、産業利

用の裾野が十分に開拓されていません。これはデータの解釈に専門的な知識が必要であることや、容易に

入手できる市販装置が存在しないことなどが原因です。」

やはり、これ以上続けても無駄だろう。話題を変えて、反物質くらいなら、分かる学生もいるだろう。

「陽電子を含んでいる物質、反物質についてですが、陽電子と電子のような感じで、反物質と物質という

関係があります。質量とスピンの全く同じで、構成する素粒子の電荷などが全く逆の性質を持つ反粒子に

よって組成される物質であります。そのため、陽電子、はプラスの

電荷を持つ。中性子と反中性子は電荷

を持ちませんが、中性子はクォーク、反中性子は反クォークから構成されています。」

この事細かに噛み砕いた説明によりやく数名の学生が顔を上げた。3000人中の数名だが。

「反物質もディラックが考案したもので、ディラックは、電子の相対論的な量子力学を記述するディラック

方程式を導いたが、この方程式から導かれる負エネルギー状態の電子の解釈について悩んでいました。

負エネルギー状態の電子は、質量が負であることから、引っ張るとそれと反対向きに動こうとする奇妙な

性質を持つため、ロバに似ていることからロバ電子《donkey electron》という名前がつけられました。

1930年、ディラックは、真空がロバ電子で満たされており、その中の泡に相当する空孔《hole》が負エネ

ルギー電子になるだろうという着想を得て、空孔理論《hole theory》を提出した。この理論によると、

負エネルギー状態の電子はあたかも正の電荷を持った電子、陽電子のように振舞うはずでしたが、ディラ

ックは、陽電子が当時発見されていなかったことから、負エネルギー

↑状態の電子は正電荷を持つ陽子に対

応しているというアイデアを推し進め、なぜ陽子が電子の質量と大きく異なっているかについては未解

決の問題としてしまったのです。この点はディラックの間違いであり、この論文が公表された直後に他の

研究者によって指摘されたが、ディラックによれば『数学上の対称性から空孔は電子と同じ質量を持つ粒

子であるべきである』ときわめてはっきり言明したのはヘルマン・ワイルであったのだそうです。」

顔を上げた数人の学生がまた顔を伏せてしまった。

「1932年、宇宙線の研究をしていた物理学者のアンダーソンにより正の電荷を持つ電子、陽電子が発見さ

れ、1955年、物理学者のセグレとチェンバレンにより、前年に建設された粒子加速器ベヴァトロンを用い

て反陽子を発見されました。この実験では反中性子も発見されたそうです。次は、我が国日本が欧州原子

核研究機構、現在の科学都市原子核研究外部研究機関で、国際共同研究実験グループにおいて、反水素原

子5万個もの大量生成に成功し8年後の2010年11月には、同グループにおいて、反水素原子38個

を磁気瓶に閉じ込めることに成功しました。現在でも、磁気瓶は、反物質を保存するための箱として利用

されています。また、2011年6月には、東大を含む、国際共同研究グループが、反水素原子を100

0秒以上閉じ込めることに7回成功しています。現在では、容器の老朽化を除く場合、半永久的な反物質

の保管が可能となっています。」

また、誰も顔を上げない状況ができてしまった。

「性質としては、物質と反物質が衝突すると対消滅を起こし、質量がエネルギーとなって放出される。そ

して、反応前の物質、反物質そのものが完全になくなってしまい、消滅したそれらの質量に相当するエネ

ルギーがそこに残ります。1gの質量は、約90兆ジュールのエネルギーに相当します。これは、現在

の、対小惑星粉碎用ミサイルとして、火星への大型宇宙船の移動の際に使用される予定となっております

す。また、発生するニュートリノが一部エネルギーを持ち去るため、実際に反物質の対消滅で発生するエ

ネルギーは、これより少ないと信じられていました。実際、科学都

市が行った実験では、1グラム当たり

の放出エネルギーは、98パーセントでしたが、これを大量に詰め込むことにより、水素爆弾よりもはる

かに強力な爆弾ができることになります。国際法では、現在、反物質を一度に10g以上生成することは

禁止されており、生成するにも国連への報告義務があります。」

むなしくなってきた。それに、外から、断続的にだが、爆発音が聞こえる。しかし、まず気にならないレベルなので、講義を続ける。

「反物質は自然界には殆ど存在しないので、人工的に作らなければ得ることがたいへん難しいです。非常

に高いエネルギーを持つ粒子どうしを衝突させると多くの粒子が新たに生成されることは既に知られてい

ますが、これは粒子が衝突前に持っていたエネルギーがそれに相当する質量に変わるためであり、物質と

反物質の衝突とは逆の事が起きているのですが、これによって生成される粒子の中に反粒子が実際に含ま

れています。そのため昔同様、人工的に高エネルギーの粒子を、粒子加速器という非常に巨大な装置を使

って作り出し、それらを衝突させて反粒子を作りだし捕獲すること

で反粒子を得ています。」

いまだ誰も聞いていない。いまだ、断続的な爆発音が聞こえてくる。

「従来、物質と反物質は鏡のように性質が逆なだけでその寿命を全く同じだと考えられてきました。この

ことをCP対称性といいます。近年、粒子群の中で「物質と反物質の寿命がほんの少しだけ違う」というも

のが出て来ました。最初はK中間子と反K中間子です。そして、B中間子もはつきりと反B中間子とでは寿命

が違うことが確認されました。日本の高エネルギー加速器研究機構、つまり現在の『輪』のことで、

Belle検出器による発見であります。「反物質の寿命がわずかに短かった」ここでCP対称性は成立しない

ことが明らかになりました。これにより、初期宇宙の混沌の一瞬の間の「物質と反物質の対生成と対消

滅」において、ほんのわずかな可能性ですが反物質だけが消滅し物質だけが取り残されるケースがあり、

無限に近いほどの回数の生成・消滅の果てに、「やがて宇宙は物質だけで構成されるようになった」と説

明できる。もちろん多種さまざまな粒子群の中のわずか2つの事例

であります。他の粒子での同様の現象

の発見やそもそもの寿命のずれの発生機序が解明されれば、この謎は遠からずすべてが解明されると期待

されています。」

一体、どのくらい話せばいいんだ。いまだ、断続的な爆発音が響いてくる。何をやっているんだ上層部は。

「将来の利用法としては、宇宙開発方面への期待が大きいですが、反物質を生成するのに必要なエネルギー

ーは、反物質を燃料として消費するときに得られるエネルギーよりも大きいため、結局は損をしてしまい

ます。これは、水素を燃料として使うために水を電気分解した後、再び燃料電池として電気に戻して消費

するサイクルに似ていますが、エネルギー密度だけを考えれば非常に高密度であるので遠い将来の宇宙開

発のような特殊な用途での利用が想像されています。しかし、反物質は物質に触れると爆発的な対消滅を

起こすので貯蔵や取り扱いには工夫が必要になります。ですが、反物質は、周囲の物質と対消滅を行うこ

とにより自身の質量の200%をエネルギーに転換できるので、宇

宙開発上課題となっている燃料の質量を劇

的に軽量化できることが期待されており、N A S Aは反物質動力の推進機関に関心を示しています。宇宙機の

エンジンとして比べれば、核分裂では核燃料の質量のおよそ千分の一、核融合ではおよそ百分の一がエネ

ルギーに転換されるのに対し、反物質を燃料として使えばその大部分がエネルギーに転換される。例えば

100 k gの深宇宙探査機を50年間加速させるのに必要な反物質燃料は100 μ gで良いのです。一方、化学燃料

によって得るエネルギーはその質量のおよそ一億分の一相当にすぎないので非常に効率が悪いとされている

ます。しかし現在でも、探査機への反物質燃料の利用は難しいとされており、なかなか目新しい進歩があり

りません。」

話が終わり、ひといきをついた。と、そのとき、ドスツ、という衝撃音とともに会場の後ろの方すべて

が、赤黒く気持ちの悪い、腕のような物体に押しつぶされた。

「な、なんだ、あれは、」

今まで見たこともないような物体だ、そしてその物体は、ゆっくりと持ちあがったかと思うと、大きな穴のあいた天井部分から、かろうじて人の顔を保っている巨大な口へと大きな手でつかんだものを運んでいく。建物の残骸と人と一緒に。

あまりのことで、誰も声を出すことができない。そう言えば、生物は、体の大きさが2倍になると筋力は4倍なくちゃ同じようには動けないんだっけ。そんなくだらない、雑学が頭をよぎる。

誰かが初めて悲鳴を上げた。当然だ、こんな状況で悲鳴を出せない自分がおかしいんだ。悲鳴は連鎖のように広がり、出口に向かって集団が赤黒い手に掴まれ、口へと運ばれる。

そう、この状況を的確に表すならば、この一言しか思い浮かばない。

まるで、地獄絵図だ、と。

ある研究者の講義（後書き）

ここって、読みにくいですか？

巨大生物とそれに挑む人々

「ようは、あの巨大生物に、食糧を与えなきゃいいんでしょ？」

美鈴が、目にあったかいタオルをかけながら言った。

「はい、あの生物は、自分の巨大化のために必要なエネルギーをすべて口径摂取します。また、そのエネルギーが足りなくなったら、自分の体をエネルギーに変え、新たな食糧を探しに動き出します」

中崎が、手のタブレット端末を操作しながら、発言した。

「簡単じゃないか。なぜ早くしないんじゃ？」

鷲頭が何も理解していない脳で反射的に答える。

「黙れ、このハゲじじいが」

美鈴が発言した。

「ハゲとはなんじゃ、ハゲとは！。わしはまだ禿げてないぞ！」

「あ、もしかして、脳の栄養分が全部髪の毛に行ってるんですか？」
藤本が発言する。

「わしをバカにするのもいい加減にせんか！わしは、素粒子物理学では、第一人者なんじゃぞ！」

「過去の栄光にすがりつく老人・・・傑作」

美鈴がつぶやいた。

「だいたい、重力子の超対称性の証明とヒッグス粒子を観測しただけじゃないですか」

秋が、めんどくさそうに言った。

「なんじゃと！今までだれも成し遂げなかったことじゃぞ！」

負けじと言い返す鷲頭。

「そんだけ年とりや、誰でもそのくらいの成果誰でも出せますよ？少なくともここにいるメンバーは」

「おぬしらは、ようわからん小手先の研究しかしておらんじやろうが！」

「私の研究は、暗黒物質の完全な解明と利用ですが、これは小手先

ですか？」

扉の所にいた黒づくめが発言した。

「あんた、まだいたんだ」

「申し訳ございません」

「小手先の研究じゃ」

少し遅れて返答した鷺頭、まず暗黒物質を理解していないみたいだ。

「やっぱ、この人、やめさせといた方が、良かったのかなあ？」

「でも、今年度に入っただけで、いきなり、理事会メンバーが殺されましたじゃ、セキュリティに疑問を抱く人たちが現れるでしょうから、あまりお勧めできませんねえ」

藤本が真面目に言った。

「な、わしを殺す気じゃったのか！お主ら、これは、わしに対する侮辱じゃぞ！」

鷺頭が、顔を真っ赤にして怒る。

「えっ、今まで気がつかなかったんですか？このくそじじい」

美鈴が、丁寧な口調で発言した。

「何が、くそじじいじゃ！ふざけるのもいい加減にせい、この小娘が！」

机を、バンツ、と、叩いて立ち上がる。

「いちお、あなたの上司なんですけど、その辺分かってますか？このくそじじい」

語尾に、くそじじいをつけるのが、面白かったのか、再度、語尾に付ける美鈴。

「良いじゃないですか、このおばさんだって、いちお、上司なんですから、敬意を払っておいて損はないですよ、くそじじいさん」

「誰がおばさんだって？」

秋の発言に怒りをあらわにする美鈴に、さらに追い打ちをかける。

「美鈴さん、あなたのことですよ？ここにいるメンバーで、おばさんって呼べるのは、あなたしかいないでしょう」

「はあ？私より年上が、そこにいるじゃない！」

指差した方向には、若宮《わかみや》がいた。

「発言を今までしていないから、カウント外です。それに、細胞の老化を防ぐのもあなたの研究の一つでしょう。研究成果を発表せずに自分で使っているんじゃないですか？」

「う、そ、そんなの証拠がないじゃないの！言いがかりはよして！」

「あ、すいません。60代のおばあさんでしたね」

「そこじゃないの！だいたい、まだ私は、40代なの・・・20代なのよ！」

「今思いつきり言いなおしましたよね？」

藤本が会話に参加した。

「き、聞き間違いじゃないの？」

美鈴が明らかに不審な態度を示していた。

「お主ら、今度わしのことをくそじ・・・」

「あ、今頃、会話に介入しないでください。無駄に酸素を消費するのをやめて、さっさと、海にでも沈んどいてください。くそじじい」

「またも、くそじじいと言われ、ぎゃあぎゃあと、反論する鷺頭だが、完全に無視する理事会メンバー。」

「まあ、この会話は、ここら辺にしときましょう。さて、本題ですが、あの巨大生物をどうかしないと」

秋が思い出したように発言した。

「今のところ、死者は、増え続けており、3700名を突破しました。」

「あゝあ、目も当てられないような惨事じゃん。で、年齢は？」

「内、約3000名が学生で、その学生のうち、保護者がいる学生は、2982名です。」

「保護者への説明は、どうでしょうか？とりあえず、旬ちゃんやつといて。」

「はあゝ、なんで！」

「良いじゃないか。減るもんじゃないし」

「十分減るって、おもに精神力が・・・」
「まあ、頑張って」

科学都市統括理事会正式発表

今日、午後5時に、巨大生物が突如出現。その生物によって、研究地区、学園地区が破壊されました。死者は、約4000名で、そのうち、大ホールで講義を受けていた学生3000名が含まれています。この巨大生物への対処は、難航しており、いまだ処理することができずにいます。これより大規模な処理作戦を決行するため、各国の大陸間弾道ミサイルの使用許可を求めています。今日、午後6時きっかりに、一斉攻撃を開始します。

★☆☆☆☆

「もう、守、遅い！」

頬を膨らませ露骨に怒る美月。

「わりー、ちよつと遅くなった」

「ごめんねえ」

「まあいいけど、はあ、ようやく解放されたあ」

後ろで店員が顔に血管を浮かせているのは、気のせいだろう。

「そういや、朱音ってどこに行ったんだ？」

「さあ？知らない」

「じゃあ、探しにいきましょうか」

両手に花？的なイベントに内心うきうきな守だった。

★☆☆☆☆

科学都市学園地区居住区第一高等学校寮の一室では、ある集団が、

会議を開いていた。

「突然だが、俺達のコレクションが燃えた。」

西村真冴也《にしむら まさや》が、発言した。

「な、どうして!」

目の細いモグラのような、岡田光政《おかだ みつまさ》が言った。

「杉田のへやに置いておいたのだが、さっきいったら、部屋ごと燃えていた。」

「そんな。あそこの部屋が一番火事が起きにくい部屋だというのに・
・・」

「へ? どういうこと?」

やせ気味に見える、折羽晃樹《おりは こうき》が発言した。

「簡単に言うと、あの部屋に置いて、隠してきた、俺達の宝物がすべて燃え尽きてしまった、ということだ」

今にも泣きそうな顔をする、西村をめんどくさそうな感じで見守る折羽。

「杉田のお母さんは、統括理事会の理事長だ。だから、息子の安全には、きをきかすのが道理。」

「はっ、じゃあもしかしたら、まだ残っている物があるかも・・・」

「・・・残念だが、完全に燃え尽きていた。どっちかっていうと何かが爆発したっぽかったが・・・」

「うおおおおおおお! 『小学生のスクール水着天国』がああああああ
ああ」

岡田が、のたうちまわる。

「なくな、燃えてしまったものはしょうがないんだ。」
そう言いながら、腕を目に当ててる西村。

「あゝ、残念だったね。」

無表情でそれをみる折羽。

「うう、我ら、炉理困《ロリコン》同盟の宝がああ」

「あ、もう帰るけん」

そう言うのと、折羽は、立ち上がり、足早に外に出た。
「めんどくさいなあ」

折羽の出てきたドアには、木の板に『炉理困』と書いてあった。

★☆☆☆☆

「さっきから、何やってんだ？」

これから、どうしようか、三人で話し合うことになったのだが、香奈枝は、一人で職員室から取ってきた、職員用のタブレット端末を使ってばかりいるし、美月に至っては、遊び疲れた子どものように寝てしまったのである。

「え、えっと・・・べ、別に何もしてないわよ？」

声が震えていた。

「何もしてないって、現にそれ使ってるじゃないか」

そう言うのと、香奈枝は、なぜか、両手を合わせ。

「ごめん」

と言った。

「何が？」

何のことか本当に分からない守。

「あ、あのね、実は・・・。守の部屋、燃えちゃったかも・・・」
てへ、っと可愛子ぶっているが、発言の内容の方は、とんでもないことだった。

「・・・」

「あ、え、えっと、燃えちゃったっていうのは、間違いかな？」

「じゃあどういう状態になっているんだ？俺の部屋は」

香奈枝は、観念したように、事実を話した。

「じ、実は、守の部屋、短距離迎撃用ミサイルで、破壊しちゃった。」

「ぶはっ」

飲んでいた、コーラを思いっきり吹き出してしまった。

「汚い！」

「なんてことしてくれとンじゃ！」

「だから、謝ったじゃん。だいたい、あんなDVD持ってるからいけないのよ！」

「DVDなんかもってねえよ！」

「うそ！『小学生のスクール水着天国』って、書いてあったもん！」

「それは、俺じゃないって、さっきいっただろう！」

「嘘ばっか言って！この、ロリコン！」

両者言い合いに疲れたのか、肩を上下させている。

「おや？夫婦喧嘩ですか？」

のっそりと起き上ってくる美月。

「夫婦じゃねえよ」

「あれ？二人で、愛の障害となる友人を殺して、追いかけてきた凄腕変態刑事も殺して、海外へ逃亡するところじゃなかったの？」

周りにいた人たちが一斉にこっちを見る。店員の視線が痛い。

「なに、あることないこと言ってるんだ。あと、香奈枝も反論しろ」

「夫婦・・・ふふっ」

顔を赤くしつつ、小さく何かをつぶやく香奈枝。

「あゝあ、夢かあゝ、残念だなあゝ」

語尾を異様に延ばしながら、美月は再び眠りに着いた。

「くっ、なんか、美月にバカにされたような気がする」

「・・・夫婦」

「さっきから何言ってるんだ？」

「ふえ、あ、え、えっと、ほら、その、あれよあれ」

突然指差した先は、隣の席で、体格のいいおじさんが3人と明らかに弱そうな、青年が座っていた。

「？あれがどうかしたのか？」

「え、えっと、ほら、かつあ・・・」

突然、守の手によって、香奈枝の口がふさがれる。隣の席の屈強なおじさんたちがこちらをにらんでくる。

「すみませんでした」

そう言うと香奈枝の手を引っ張り、店を後にした。

「え、なんでいっちゃうの？」

あわてて、後を追う美月だが、店員に腕を掴まれた。

「お客様、お会計を済ませてください。」

そう言われ、制服のポケットを探ったが、携帯以外でてこなかった。

「すみません。待ち合わせをしているんです。」

そう言うと、また、元の席に戻った。

「なんか繰り返してるきがする。」

開いた携帯に午後6時00分と、表示されていた。

★☆☆☆☆

『これより、巨大生物に対し攻撃を行います。』

美鈴が、ヘッドセット越しに、全部隊に命令を下した。

『日本標準時刻午後6時10分まで、超長距離兵器での攻撃を行い、敵生物の死亡が確認できない場合、銃狩り部隊《ガンハンター》による、攻撃を開始します』

先ほどの会議室を変え、統括理事会全メンバーを収容できる、議事堂の中央に美鈴が座っている。

『零落の破壊神《レールガン》を起動、その後、準備ができ次第、巨大生物に向けて、1200ミリの抗熱金属弾を射出してください。月面無人基地にある、月の監視兵《ムーンソルジャー》を科学都市学園地区に狙いをセット、準備ができ次第射出してください。静止衛星、華鳥風月《かちょうふうげつ》の対消滅砲《アンチマターガン》を科学都市学園地区にセット、こちらも、準備ができ次第射出してください。また、太陽を周回中の、光視滅裂《アイズインポシップル》の、複合鏡レンズを使い、地球を周回している、複数の衛星を経由し、太陽のエネルギーを集め、科学都市学園地区に向かっ

て照射してください。また、これの使用は、三回までとし、巨大生物以外に、生命反応がない場合のみ使用することとします。』

言い終えると、美鈴は、

「こんなに使ったんだから、あの生物はあとかたもなくなるけど、事後処理がねえ」

と言った。

「でも、そのくらいしなくては、あれを止めることは、できないでしょう。」

秋が、冷静に発言した。

「まあ、それぐらいの被害だったら、日本銀行に預けている、科学都市運営資金を使って、ドル上げをしたら、すぐ払えますよ。」

藤本が、PCとにらめっこしながら言った。

「バカねえ、そんなこととして、国連から、経済制裁されたらどうすんのよ。資源とかは、輸入しないと成り立たないんだから、この都市は、」

美鈴が、小馬鹿にするように発言した。

「んじゃ、まあ、いったん、休憩！」

そう言って、でていく、統括理事長を見ながら、次々と統括理事会のメンバーが立っていった。

☆☆☆☆

「はあ、はあ、はあ」

自称最強の魔術師は、疲れていた。

「くそ、なんでこんな目に！」

それと言うのも、彼は、二重人格者で、つらくなると今の人格のような、まともになってしまう。普通は、逆なのだが・・・

「なんだ。あの黒い影は、」

ふと、視界に入った、とてつもなく巨大な物体に驚いた。見る事さえも拒むような異様な雰囲気をもっている。

日がもうすぐ落ちる。

「動いてやがる。物騒な世の中だな……。よし、いっちょうがんばって倒してみるか」

この人格になると、なぜか、正義感にあふれてしまう、だが、そんなことも気にする暇もなく体は、勝手に動き出していた。

「ふはは、我の名は、史上最強の魔術師、盾有り《イージス》だああああゝ」

全く意味不明な言葉を発しながら、先ほどまで、防ぐことしかできなかった、攻撃を気合いでよけ、巨大生物のほうへ、周りに多大な衝撃波をまきちらしながら飛んで行った。

その姿を生徒会室から攻撃を加えながら見守っていた少女は、

「変なおじさんが無謀にも怪しい物体に向かって飛んでいっちゃたなあ、これってどういう風に報告しようかな？」

と、つぶやいた。

★☆☆☆☆

駅ビルのなかに非常ベルの電子音が響いた。

中にいる人たちは、我先にと、地下に逃げ込もうとした。しかし、入りきらな人たちが赤黒い手によってつかまれ、巨大な口へと運ばれる。

その光景を見ていた、守と香奈枝は、思わず、吐き出しそうになった。

「う、うそだろ。なんでこんなことに……」

声が震える。当たり前だ、こんな状況で恐怖を覚えないやつは人間じゃない。

「は、はやくにげましょ」

小さく震える声で、言った香奈枝は、力の入らない手で、手すりを掴んでいた。

「ああ、でも、地下に行くのはこういうときにはおそらく逆に危険

だ。」

「え、でも、外の方が危険なんじゃ・・・」

「あれがもし、50トン近くあったらどうする。あきらかに、おもしろい。ジャンプでもしてくれれば、一気に地下はつぶされてしまう」

「じゃあ、どこに行くの？」

「ついてこい」

そう言って香奈枝の腕をひっぱたが、香奈枝は動く気配すら見せなかった。

「どうしたんだ？」

「腰、抜けちゃったみたい」

「・・・しょうがないな」

そう言う、守は、しゃがんだ。

「ほら、おんぶしてやるから」

すると、香奈枝は、ゆっくりと、体重を、守に預けた。

「っ、おまえ、軽いな？」

「、そう？」

「胸がないぶん、超軽いぞ」

軽い気持ちで言ったつもりだったが、後ろから、耳をつねられた。

「いたたたたた！」

「うるさいわね！この変態！」

本気で怒りかけた香奈枝は、思いつき守の耳をつねる。

「だから、痛いって！」

「じゃあもう、そんなこと言わないって約束して！」

「わかった、分かったから、やめろって、」

そう言う、香奈枝は、耳をつねるのをやめ、代わりに小指を差し出してきた。

「な、何？」

「約束！指きりげんまんよ！」

早くして、と、うるさく言う香奈枝にはかなわず、守もしぶしぶ

小指を差し出す。

「指きりげんまん、嘘付いたら、濃塩酸を飲めます。指切った!」

「ずいぶんとひどい罰だな」

「当然でしょ。これぐらいしとかなないと、美月なんか、ほんとに針千本飲もうとしたんだから」

「マジで? そんな馬鹿だったとは、」

「結局飲まなかったけどね」

「・・・それって、美月の作戦なんじゃ・・・」

「! そうなの?」

「い、いや、まあ、あいつだいたいぶ策士的な感じじゃないか。だから、止めることまで想定していて・・・」

「やられたわ! くっ、次あったら、絶対仕返ししてやるんだから!」
話をそらすことで、あの話題は、とりあえず、後回しにできた。

「そうだな」

上機嫌になった香奈枝とともに、二人は、恐怖から、逃げて行った。

★☆☆☆☆

科学都市統括理事会総本部ビルには、現在、ひとり一人いなかった。そう、ひとの子ひとり・・・。

「暇です。」

ビルの中に、合成音声が響いた。

「なぜ、誰もいないのですか。仕事ありませんし。」

一人で、勝手に話している。

「暇です。」

さっきの言葉を繰り返している。

「なぜ、誰もいないのですか。仕事ありませんし。」

この独り言が、ビルに清掃員が来るまで続いたという。

★☆☆☆☆

「はあー、すごいな」

あるビルの上で、一人の男がつぶやいた。

「しかし、あれって、どうやって作れるんだ？」

20代前半の風貌の男は、両手に持っていた、バレットM82A1の引き金を同時に引き、赤黒い謎の生物に向かって、50口径の弾丸を射出した。命中。

「あれは、超進化研究の一環で、一世代で、数千世代分の進化をやるうとした単なる、失敗作です。」

斜め後ろに燕尾服を着た初老の男が言った。

「なるほどね、それなら、一気に肩をつけなきゃ、どんどん耐性を持っていくわけだ。」

先ほど、命中した弾丸の痕は、すでに消えていた。すると、今度は、本来ないはずのフルオート機能を使い、次々と弾丸を射出していく。普通なら、立って打つことさえできない、バレットM82A1だが、男は、軽々とそして確実に一点に命中させていく。そう、まるで、ハンドガン撃っているような感じで、だ。

「その通りでございます。ですが、急激な進化をするには、大量のエネルギーが必要となるので、エネルギー摂取するための食糧がなくなれば、勝手に死んでしまいますが・・・」

燕尾服の男が、はっきりとした口調で答えた。

「じゃあ、切り刻んでいけば、いつか、倒れるってことか？」

「はい、ただ、切り口は、深くえぐるようにしなければ、すぐに再生し、その場所は、さらに固くなり、切ることが難しくなるでしょう。」

燕尾服の男は、どこからともなく取り出した、日本刀らしきものを差し出しながら、

「万が一、ですが、あの生物が、襲ってくるようであれば、これをお使いください。」

「ん？普通の日本刀か？」

「いえ、重力子刀《Graviton》でございます。重力相互作用を伝達するための重力子をコーティングするので、うまくいけば、相手を原子レベルで破壊することも可能です。扱いには、十分ご注意ください。」

男は、手に持っていた、巨大な剣を持ちかえ、重力子刀《Graviton》を腰にさした。一方、持ち替えた手にもつ巨大な刀は、自分の身長の一・五倍は、ゆうにあるだろうに、軽々と持っている。

「じゃあ、いつてくるか。」

「おやめ下さい。それでなくとも、鶴岡様は、いろいろと問題がお・・・」

「そのために、くれたんじゃないのか？」

燕尾服の男が、咎めるように言うと、

「あくまで万が一の場合にお使い下さいと言ったはずです。」

「うるせえな、おれは、依頼されれば、その通り動くが、そのほかのことは、自由にさせてもらうのが条件で、『矢野下組』に入ったんだぞ。」

矢野下組は、基本的に科学都市での活動はしていないが、外の世界では、政治家から小学校の校長まで幅広く仲間？を有している、やくざグループだ。そんな組の組員に勝手に動いて、殺されない人は、彼以外いないだろう。

「・・・さようでございますか。」

組での彼のたち位置を思い出し、素直に従う燕尾服の男。

「それじゃ、とりあえず、これ、もっというてくんねえか？」

そう言うのと、先ほどまで使っていた、バレットM82A1を渡した。

「かしこまりました。」

鶴岡と呼ばれた男は、剣を片手で持ち、軽々とビルから飛び降った。

「いつてらっしゃいませ。」

燕尾服を着た男は、誰もいなくなった屋上でつぶやくように言った。

「くれぐれも、本気を出さないよう、お気を付け下さい」
すでに聞こえないと分かっていたが、これだけは言わずには居られなかった。

★☆☆☆☆

「守、大丈夫？」

心配そうに香奈枝がきいた。

「ああ、だいじょうぶ、だ。」

明らかに無理しているのが分かる声色で言った。

「もう大丈夫だから、おろしてもいいよ？」

「無理すんな、それに、ここじゃ、歩くの大変だろう。」

そういつて、顎で指した方向には、巨大な穴が開いていた。

「地下に行ったやつらは、大変だろうな。」

「そう言えば、美月ってどこに行ったの？」

「逃げたんじゃないかな、どうせ、ここら辺はもう、非常事態区域になってるだろうから、防衛部隊にでも助けられたりしてたりな」
「そうだね。」

それが、どれほどの希望的観測か、二人とも理解していた。一帯は、血のにおいが満ちており、死体の一部が、放置されている状態なのだ。だが、自分たちは生きているのだから、きっと美月も生きていると信じている。

「あ、守、あれ、」

そう言つて、香奈枝は指をある人影を指差した。

「ん？なんだ、あれは」

よく見ると、夕方、学校の校庭にいた、自称最強の魔術師のおっさんだった。

「なんで、こんなところにあのおっさんがいるのよ！」

「しらねえけど、もしかして、あの子がやられちゃったのか？」

あの子とは、生徒会室から、とてつもなく長いスナイパーライフで、おっさんを攻撃していた子だ。倒されたのかと思うと、残念でならない。あのおっさんを止めれる人間がまた一人減った。

「あ、飛んでいく！」

そう言った時にはもう、過ぎ去っていた。

「あの方向って、赤黒くて、気持ちの悪い奴がいたところじゃないの？」

「もしそうだったら、あいつを倒してくれるかもな、」

少し笑みを浮かべながら、言った。

「じゃあ、学校に向かおっか、あのおっさん、あっち行っみたいだし」

「そうだね。」

とそう言ったときに、後ろの方から、桁違いな爆音がとどろいた。

「っ、な、何だ？今の音」

とっさに耳を防ぐため、手を離れたせいで、香奈枝が落ちた。

「痛った。何すんのよ！」

「わ、悪りー」

「全く、何やってんだか？」

そう言いながら、立ち上がる香奈枝を見て、不審に思った。

「香奈枝、なんでそんな平気なんだ？耳痛くないのか？」

いまだ、耳がキーンという音が、聞こえる守に対し、香奈枝は、全く平気な様子である。

「あ、守ってこれ付けてなかったんだ。」

そう言うと、耳から、耳宣らしきものを取り出した。

「これって、本来、戦場とかで、大音量を聞いて、気絶したりしないようにするためのものなんだけど、小さい音は、大きくなって、大きい音は、普通に聞こえるぐらいの大きさに聞こえるの。良かったらいる？」

そう言って、ポケットの中から、二つ、同じようなものを取り出

す。

「どうやって手に入れたんだ？これって、」

耳にはめながら、守がきく。すると、香奈枝は、少しきまり悪そうに、

「え、えっと、これは、その、とってきたの。」

「ん？どこから？」

「そ、その、研究所から・・・」

「犯罪じゃねえか！」

「まあ、大丈夫でしょう、多分」

「多分じゃ、意味がないだろう！」

「でも、もう、つかっちゃってるし、いいんじゃないの？」

「あゝ、めんどくせ。もういいや。そういや、もう歩けるのか？」

「あ、うん、もう大丈夫」

「そうか、じゃあ行こうか」

そう言うと、香奈枝は、うん、と、うなづき、守と手をつないで、歩きだした。

★★★☆☆

科学都市サイバーセキュリティ監視局は、忙しそうに駆け回る人たちで、騒がしかった。ただ、一人を除いて。

「局長、少しは、働いて下さいよ」

気軽な感じで、話しかける、平本海斗《ひらもと かいと》。

「ん？面倒だからやだ」

神崎が、めんどくさそうに答える。すると、あきらめ早く、そそくさと、平本は、自分の仕事に戻った。

「あゝあ、暇だなあゝ」

誰にも聞こえない声で、つぶやく神崎だった。

★★★☆☆

科学都市中央地区中央国際空港では、現在、一人の大使が、惰眠をむさぼっていた。

「そろそろ、起きてください。」

スーツを着た生真面目そうな男が、アメリカ大使に話しかける。

「まあ、いいじゃないか、会談は、延期になったのだろう？ 少しくらい寝かせてくれ」

「全然少しじゃないんですけど、」

時刻は、6時5分、科学都市が、飛行禁止令を出しているため、帰れずにいた。と、そのとき、爆破う音が聞こえた。

「な、なんだ？」

「うるさいなあ」

気だるそうに起き上り窓を見る大使。

「おお、すごいな。まるで、光の柱じゃないか。」

だが、だんだんそんなことを言っている状況では、なくなった。光の柱がこちらに向かってくるのだ。

「・・・まぶしいな」

近づくにつれ、まぶしくなっていく。

「なんか、やばそうですよ。逃げましょう！」

徐々にスピードを増して近づいてくる光の柱。

「ああ、なんかばそうだな、」

そのとき、一瞬のうちに目の前まで、光の柱が近づいた。

「・・・」

叫ぶ暇もなく、大使とその秘書は、消し炭にもならず消え去った。融解した建物を残して・・・

巨大生物とそれに挑む人々（後書き）

書き直しました。

戦い、自称最強の魔術師は今！

科学都市研究地区倉庫街に一人の少女がいた。

「えーっと、ドレだったかな？」

美月は、目の前にあるタッチパネルで、倉庫の中身を検索していた。まわりには、大量のコンテナが所狭しと並んでいた。

「あ、あった！これよこれ」

そう言うと、コンテナの一つがアームによって持ち上げられ、すぐ横まで運ばれてくる。

「よし、じゃあさっそく、装備っと」

そう言うと、コンテナの中にあった、物が次々と外に出される。

「そうだなあ、とりあえず、力場固定型エネルギー循環式絶対防御装置《スーパージス》と、コンタクト型ハイパーアイ《height speck i》は、もっていくとして、・・・あ、これって、超足が速くなるやつじゃん！これも持っていこう。うーん、やっぱ武器は、反物質粒子砲と自立浮遊型荷電粒子砲と、重力子刀・・・って、ないじゃん！なんでよ。刀なくちゃ、かっこよくないじゃん！うーん、しょうがない。これ使おう！」

そう言って、選んだすべての武器を腰や手に持ち、美月は、巨大生物の居所へと向かった。

「私を怒らすとどうなるか、ちゃんと教えないとね」

亜音速で走っていく美月。一步一步が、とてつもなく広い。周りに衝撃波をまきちらしながら、進んでいく美月は、まさに、走る公害だ。

街中をかけていく少女。ただその姿は、速すぎて、見えない。

★★★☆☆

自称最強の魔術師は、巨大生物と戦っていた。

「ふ、この程度か」

生成した反物質を、巨大生物に当て続け、対消滅によって、あたりに莫大な衝撃波をまきちらしていたため、街並みは、変わり果てていた。

「はっはっは、倒せる、倒せるぞー！」

そう言った時、横から、閃光が走った。

「むっ！」

何が起こったのか、振り向いた時にはすでに光源は消えていた。

「なんだったんだ？」

不思議に思いながらも、巨大生物にさらなる追撃を加えようと正面を見た瞬間異変に気がついた。

「痛！」

よくみると、右腕が肘のところからなくなっていた。自分の能力を照射する方向を頭でイメージしやすくするために巨大生物の方に指していた腕が、きれいさっぱりなくなった。切り口からは、鮮血が溢れだしていた。

「くそっ、何なんだ、一体！」

こうなってしまった以上、止血をするのが先決だと判断した、自称最強の魔術師は、きていた服を口でちぎり、左手を使い腕に巻こうとした。しかし、なかなかうまくいかず、何度も失敗をする。

「ぐ、・・・」

大量の出血で、意識がもうろうとしてきた。これでは、倒れてしまいうのも時間の問題だろう。

「無様だな。」

後ろから、声がした。

「だれだ！」

「まったく、おまえのせいで、ここら辺一帯が壊滅状態じゃねえか。おれのお気に入りの店まで壊れちまったしよお」

後ろを振り返っていたのは、若い男だった。しかし、彼の右手には、巨大な剣が握られてある。

「というわけで、おまえを止めに来た。これ以上の破壊活動を行うようなら、ここで殺す。」

冷徹な目で見降ろされ、流れ出す鮮血より、目の前の恐怖の方が上回った。

「ま、その出血じゃ助からんだろうがな。せいぜい努力しろ」

男は、腰にあった、刀も抜き去り、巨大生物の方へと歩き出した。

「ま、まってくれ。俺は、あいつを倒すためにやったんだ。破壊活動を行ったのは、お・・・」

意識が保てなくなり、ぐったりと倒れ込む。

「そうか、じゃあ、余計に死んでくれないと世の中の迷惑だ」

飛び上がり、空中へと舞う。剣を上段に構えた。

「は、この俺様にかなう者などいないってことを証明してやるよ！」
男は、そう言うのと、巨大生物に切りかかった。一瞬のうちにひとつ、また一つ、と、切り口が増えていく。

「この、断絶刀「刹那」にかなうと思うなよ、この、デブが！」

巨大生物を縦に切り、地面まで、数メートルのところで、空気を音速以上で動かしている足でけって、飛び上がる。

落ちそうになると、足を超高速で空気をけって、また飛び上がる。人間離れしたその動きは、目で見ることさえできないだろう。音速を軽く超える速度で空中を飛びまわる。できた衝撃波は、すべて、巨大生物に当たっていて、まるで、計算しつくされた戦闘だった。

「よえーなあ、こんなので、てこずる科学都市ってもっとよえーよ！」

腰に帯刀していた、重力子刀《Gravition》を抜き去り、左手で持ち、右手で剣を持つ。剣の重量は、とてつもないはずなのに、軽々とふるい、はじめてつかう重力子刀《Gravition》も、分子レベルでの重力操作という性能を持て余すことなく使用する。その姿は、まるで無駄のない、芸術のようだ。

巨大生物の再生速度よりも早く切り刻んでいるため、切られる一方だった、巨大生物も反撃を開始した。

「があああああああ」

ひととき大きな咆哮だったが、ひるむことなく、刹那の斬撃を繰り返す。

そのとき、巨大生物が、光を発したかと思うと、爆風が、あたりを覆った。

「なんだ？あいつ、さっきの変な奴と同じ能力もってんのか？」

巨大生物は、数千世代分の進化を一世代で終わらしてしまうほどのスピードで進化する。だが、世代交代の際、普通は、親が後から得た能力は、基本的に受け継がれない。たとえば、親が鍛えて筋肉が隆々としていても、筋肉が隆々とした赤ちゃんが生まれてくるわけではない。だが、この巨大生物は、鍛えた分と、遺伝的特徴をふまえて進化していく。そのため、実験としては、失敗作とされてしまったわけだが、外敵から受けた攻撃に耐性をつけ、すぐにそれを遺伝子に組み込むことができる巨大生物にとっては、攻撃を攻撃と認識できる内に倒されなければ、この地球上で最強ということになる。

先ほどから、自称最強の魔術師の攻撃を受けていた巨大生物は、それに対抗するため、自らも反物質を体で生成したということなのだ。体で反物質を生成することは、自分の体をすべて根本から造り変えることになるが、この生物は、それをやってのけたのだ。

「はっ、少しはやるようになってきたってか？」

そう言って、切りかかるが、重力子刀《Graviton》は、反物質と対消滅を起こしてしまい、全く切ることができない。

「ちっ、めんどうだっ！」

今度は、剣で切る。刹那の時間で物質と物質の結合を切り裂く剣は、反物質に対消滅を起こさせる時間よりも早く切り裂く。そのため、対消滅は起こらず、ただ、切られた反物質のみが残る。

しかし、物質と当たる面が増えたため、ところどころが対消滅で消滅していき、あたりに膨大なエネルギーを放射する。

だが、そのエネルギーを感じないかのように利用して、さらに切

る。巨大生物は、徐々に体積を減らしていき、とうとう、対消滅を起こせるだけの反物質も底をつき、元の赤黒く気持ちの悪い生物へと戻った。ただ違うのは、綺麗な切断面をさらけ出しているところだろうか。

「チェックメイト、だ。このデブめ」

肉片と化した巨大生物は、動きを止めた。

巨大生物は、あっという間に切り刻まれた。たったの一振りで、数十回切ったかのような切り口ができ、ばらばらと、地面に崩れ去っていく巨大生物は、あまりにも、あっけなかった。残った、残骸は、動くことなく、静寂を保っている。

「お迎えにあがりました。鶴岡様。」

初老の男が言った。

「おう、ありがとな、多田」

多田と呼ばれた男は、静かにタオルを渡す。

「早く、お拭きになって下さい。例の生物は、何を持っているかわかりませんので。」

鶴岡は、タオルを受け取り、顔から拭く。

「あゝあ、もうちょっと、手ごわくってもよかったんだけどな」
つまらなそうな顔で、つぶやく。

「さようでございますか。それで、どうでしたか？重力子刀《Graviton》の調子は？」

「ああ、まあ、使えないことはないが、やっぱり、断絶刀には、劣るな」

そう言って、断絶刀「刹那」を振り回す。

「はあ、ですが、破絶刀「覇壊」は、まだ、見つかっておりませんので、しばらくは、その刀をお使いください。」

少々困った様子を見せる多田だったが、鶴岡は、軽い感じで。

「まあ、いいけどな、見つけれらるまで、気長に待つことにするわ」

二人は、そのまま、歩きながら、その場を去った。

★☆☆☆☆

「あれ？ おっかしなあ」

美月が、元駅前に来て首をかしげている。

「なんで、倒されちゃってるんだろ？」

ところどころに残っている、肉片を見渡しながら、ひとを探す。

すると、かなり遠くに手をつないだ、二人を見つけることができた。

「あ、香奈枝と守だ！」

3キロ近く離れているのでは？と、思われる距離では、普通の人間の肉眼では、見ることはできないのだが、倉庫にあった、コンタクトレンズをつけたため、その距離まで見ることができたのだ。

「お二人さ〜ん」

これまた、とてつもないスピードでかけていく少女。ほんの3秒足らずで、追いついてしまう。

「わっ、美月、あんた何やってんのよ！」

一瞬だが、暴風が吹き荒れたため、香奈枝のスカートがめくりあがり、内側の下着が一瞬だが守には見えてしまった。香奈枝は、顔を真っ赤にして、スカートを押さえた。

「見た？」

「見てない」

わざとらしく目をそらす守に確信を得た香奈枝は、守に回し蹴りをくらわす。

「ぐはっ」

「変態！」

回し蹴りをした際に、再度見えた下着だったが、そのことに香奈枝は気がつかない。

「あ、水色の縞パ・・・」

今度は、美月が腹のあたりにけりを食らった。

「ぐ、い、いったいなあ。」

「変なこと言わないで！」

さらに、顔を赤くして起こる香奈枝。そこに、突然風が吹いた。「！」

再び、スカートがめくれあがるが、それを、守は、見る前に、頭を殴り飛ばされた。

★☆☆☆☆

「・・・まだ、頭が痛い。」

巨大生物事件から、2日後、学校には、いろいろと傷跡が残っていたが、授業は、通常通り行われた日の放課後、頭を押さえながら、守は、つぶやいた。

「あんたがわるいんでしょ！私の、ぱ、パンツ見たんだから！」
最後の方の声が、大きくなり、まわりの人たちが、一斉に振り向く。

「香奈枝、あんまそういうこと、大声で言うな・・・。俺まで恥ずかしいじゃないか」

「・・・」

うつむき、顔を赤くする香奈枝だが、その隣には、能天気な。

「ま、気にしないことよね。でも、香奈枝は、守に見られることが、実は、うれしいんだy・・・」

香奈枝が無言で、美月に、回し蹴りをする。

「うう、香奈枝って、そんな暴力キャラだっけ？」

再度、香奈枝が、美月に回し蹴りした。

「おい、もうやめとけて、泣きそうだぞ」

美月が、ぺたん、と座り込んで手を顔に当てていたので、とっさに、そう思ったのだが。

「この子、泣いてなんかいないわよ！全く、」

「え、分かったかった？」

ケロッ、とした感じで、顔を上げた。

「嘘泣きかよ。」

「よくあることだよ。特に、ミステリー小説とかで、犯人の女が、死んだ夫のことを悲しむところなんかほとんど嘘泣きだよ」

「ミステリー小説、呼んだことのない人が言うことじゃないでしょ」

「まあ、いいじゃん。細かいことは、気にしないようにしないと、嫌われるよ」

「！」

「？」

いきなり、香奈枝が、こつちを見た。

「え、えっと、その、あ、あのね、守。」

「何？」

「だ、だから、その」

「おお、良い展開！このまま、ミステリー小説的に恋敵を二人でやっっちゃえ〜！」

騒ぎ立てる美月は、再び、回し蹴りを食らった。

「な、何言ってるのよ！そ、その、やっちゃえて・・・」

「何言ってるんだ？香奈枝？」

急にまた、顔を赤くした香奈枝に不信感を覚えつつも、生徒会室の前に着いてしまったので、結局聞きそびれてしまった。

「遅いぞ、貴様ら」

「授業サボったやつに言われたくはねえよ」

「・・・」

朱音が黙った。

「あ、マジだったんだ」

「生徒会役員としてそれはちょっと・・・」

「あはは、サボっちゃったんだ。不良だね！」

腰に台頭してある刀を抜いた。

「まって！銃刀法違反がこの国には、あー・・・」

「問答無用、この刀で切ってくれる！」

ぎゃー、と言いながら、逃げる美月を見て、守は、平和だなあ、と思った。

「こんな、日常が繰り返されるだけでいいのに・・・」

「何言ってるの？そんなの面白くないじゃない」

全く、懲りていない香奈枝だった。

戦い、自称最強の魔術師は今！（後書き）

とりあえず、これで、一章は、終了です。

新たなる危機

科学都市第16地区の交差点のあるマンホールから、男が出てきた。

「よっと、まぶしいな」

作業服と着た男は、腕で、光を遮ったところで、黒のスーツの集団に囲まれた。

「動くな！」

黒スーツの男たちは、黒い武器を見せながら言った。

「はあ、科学都市も末期だなあ。そんなものもってきてどうするわけ？ そんな長い銃じゃ、俺は、殺せないよ？ あ、短くてもだめか」
作業着の男は、黒スーツの集団をバカにするように言った。

「ぶぶつ、デグチャレフPTRD1941って、どんだけ古い銃なんだよ。あはは、うける。そんな、何十年も前の銃を使ってる君たちの助言だ。俺の半径、6兆光年以内から即刻でろ。じゃないと殺す」

「どうしても俺を倒したいんなら、自走式多連装ロケットランチャーMLRS・HIMARSとか、EFV遠征戦闘車ぐらいもってこないと」

周りを囲まれていたが、焦る様子すら見せないどころか、笑みまで浮かべる作業着の男を不思議に思いながらも、上層部からの依頼のため即時拘束する必要があった。

「科学都市条例第72条、重要施設への無許可侵入で、おまえの身柄を拘束する。」

そう言ったが、作業着の男は、虚空を見たままだ。

「おい、聞いているのか？」

返事はない。さっさと捕まえようと、部下に指示した時、男が、服の中から袋入りの飴を取り出し、道路の方に投げつけた。

「！」

とっさのことに反応できなかった黒スーツの集団は、思わず、飴を目で追ってしまう。

「誰も俺を捕まえることは、できない。」

一言。そのとき、おばあさんが、道路へと急に飛び出した。トラックが来ているにもかかわらず。

「おい、まて！」

黒スーツの集団が見ている中にもかかわらず、歩道橋の階段を上って行った。

だが、黒スーツの集団のひとりが気がついた。おばあさんが、走っていく方向に、子ども、二人がいるということ。さっき、作業着の男が投げた飴を拾って二人で何かを話していた。それに気がついたトラックは、ブレーキをかけ、ハンドルを回し、止まろうとした。

そして、走ってきた、おばあさんを引いてしまった。

「・・・」

交通事故が起こった。ただ、それは、普通のことではなかった。

科学都市は、通常、『ジェネシス』と呼ばれる、南極研究所が管理している、超並列量子演算機器《スーパーコンピューター》によって、起こる事故すべてを予測演算し、その事故を起こさないように対策をする。そのため、『ジェネシス』の演算結果に間違いがない限り、事故は、起こらないのだ。そして、その『ジェネシス』は、演算を失敗したことは、これまで、一度もない。

「どうなってるんだ？」

数人の黒スーツが、男を追ひ、歩道橋の階段を上る。

その間、事故は、連鎖するように次々と、他の車両を巻き込んだ。そのうち、一台が、歩道橋の階段に突っ込み、黒スーツを数人巻き込んだ。

「おい、早く追え！やつを逃がすな！」

だが、作業服の男を追う道がなくなった。作業着の男は、歩道橋の中央に立っている。そして、しきりに、携帯を確認していた。

「あ、」

ふと、視界に入った、煙を出しながら落ちてくる物体。SCF-554だ。科学都市が誇る、最新型の戦闘機が、墜落してきたのだ。しかし、通常、SCF-554は、科学都市外周部を旋回して、領空内に無断で侵入してくる飛行物体を撃墜しているはずだ。内部まで入ってくることはまず、ありえない。胸騒ぎがする。

「何が、起こっているんだ・・・」

と、つぶやいた時、歩道橋にいた、作業着の男が、歩道橋から飛び降りた。

が、突然、暴風が通ったかと思うと、男の姿は、消えていた。

「くそっ」

近づいてくる戦闘機。通常では、あり得ないことばかりが、続けて起こる。こんな状況は、生まれて初めてだ。今なら、宇宙人にだって会えそうな気すらしてきた。

そして、戦闘機は交差点に墜落した。その場にいた人たちは、誰ひとり、生き残ることなく・・・。

★★★☆☆

「江戸の寺小屋で、乱〇パーティー」

朱音の発言に、一同騒然とした。

「えっと、朱音？なんでそんなことをいつちやてるのかな？」

「いや、この本に出てきたものでな。思わずつぶやいてしまった」

「なんつー本読んでんだよ！」

「別にいいではないか。私がどんな本を読もうと、貴様らには関係のないことだろう？」

「そんなもの学校で読むなってことよ！」

「この本は、いたってまじめな本だぞ！」

そう言って、朱音は、本の表紙を見せてきた。

「えっと、『よくわかる、古文読解術を身につけよう』？」

「そうだ、これは、真面目な本だ。」

「ちょっと中身見してみろ」

朱音が、良いだろう、と言ったので、本を受け取り、中身を読んだ。

「ぶっ、これ、絶対表紙間違ってるだろ！なんツー内容だよ！」

「ちゃんと読め、歴史が書かれてある」

「どこにだ！このどこに歴史が書かれてあるんだ！」

「ほら、ここに『寺小屋の子ども、10歳にして子作りに励む』と、書いてあるだろう」

「おかしいことに気づけよ！」

「あれ？そうだったけ」

真剣に悩んでいる美月と香奈枝。

「何悩んでんだよ！どう考えたっておかしいだろ！」

「だって、香奈枝と守だって、子作りに励んでいるんでしょ？」

香奈枝が美月にとび蹴りをくらわす。

「痛ったあい」

「当然の報いよ！」

そう言うともた、自分の指定席に戻って行った。

「否定してから戻れよ！」

「・・・」

会話が続かなくなった途端、朱音は、本の続きを無視して読み始めた。そんな、朱音を見て。

「まったく、学校をなんだと思っているのかしら？」

「ゲームをしながら言っても説得力無いぞ」

香奈枝は、わざわざ、視聴覚室からもってきた、42型テレビで、大ヒットゲーム『モンスターハント』で、あそんでいた。

「あ、！何やってくれんのよ！この三段腹巨大豚！」

コントローラーを床に投げつけ、しばらくすると、コントローラーを拾い再び開始した。

「おまえなあ、なんで、わざわざ、ここでゲームやってるんだ？」

「うるさいわね！良いじゃない、せっかくレベル963まで行ったのよ！もう少し、あともう少し」

真剣に取り組んでいる香奈枝だったが、突然、生徒会室の電気が消えた。

「あ、」

「！」

明りが消えて、外から差し込む日光だけとなった。そこに、

「何をしているんですか！あなたたちは！」

扉を開け放ち、国語教師が、叫ぶ。

「げっ、砂川じゃん」

「先生をつけなさい。全く、学校でゲームなんかするんじゃないありません。没収。」

砂川恵子《すながわ けいこ》と香奈枝が、ゲームの取り合いをする。

「離して下さいよ、くそばばあ」

「何を言うとるんですか！」

非常に似合わない眼鏡をかけた、砂川は、叫ぶようにいった。

「あの、先生？なんで、電気が落ちたんですか？」

「如月さんがゲームをしとったからです。」

「な、あんたねえ、人が真面目にゲームしてるときに、邪魔をしないでください。」

「先生に向かって、あんたあ、とは、なんねえ。ゲームする方が悪いでしょ！」

「うるさい、さっさと散ってしまえ、若づくりしようと頑張ってるけど、効果が全く現れていないお婆あさん！」

「とにかく、没収！さっさと、よこしなさい」

二人が、いっこうにやめないの、とりあえず、外にあるブレーカーを入れに行こうと守は、外に出た。

「もう、先生もやめてください。はつきり言って迷惑です。くそばばあ」

美月が言い合いに参加してさらに場合は、混沌を極める。ブレーカーを入れると、生徒会室に光が戻った。

「あ、こら、砂川！やめ・・・」

ゲーム機のコントローラーを砂川が手に取り、偶然か、セーブデータの画面が表示されていて、『セーブデータを削除しますか？』という表示が出でいた。そして、砂川が、○ボタンを押してしまい、香奈枝の、2096時間の努力が消えてしまった。

「ああああ、」

「とにかく、これは、没収。」

放心状態の香奈枝をほって、砂川は、ゲーム機とともに立ち去った。

「わ、私の・・・」

そう言うと、香奈枝は、ふらふらと立ち上がり、生徒会室を出た。

「おい、どこに行くんだよ」

「ちょっと、そこまで・・・ふふっ」

不気味に笑う、香奈枝に、これ以上話しかけることができなかった。

★☆☆☆☆

「今回の災害での損害は、約3580兆円ですが、問題は、これをどのように支払うかですが・・・」

藤本が、真面目に発言した。

「ん？ふつーに、払えばいいんじゃないの？」

美月が聞き返す。

「額が、1000兆円以下なら、どうにかできたのですが、科学都市が日本円で持っている全資金は、1020兆円です。ですので、全額払うのには、後、約2560兆円ほど必要なのです。」

藤本が再度発言した。

「わかつとらんのお。ドルやユーロを換金すれば日本円になるじゃ

ろうが」

明らかなバカ発言に一同、言葉が詰まる。

「バカなおじいさんは、ほっというて、段階的に支払っていけば、いいんじゃないのですか？」

秋が真面目そうに発言した。

「まあ、そうなんですが、日本政府から全額即時払うようにと、通達が来てしまっているもんですから」

「そう、じゃあ、無視しましょうか」

「いえ、そんなことをしたら、経済制裁食らいますよ？ただでさえ、資源の輸入制限がかかってしまって大変だというのに・・・」

「それなら、いっそのこと、超円高にしちゃえば？」

「そうですね。一時的に、輸出を制限して、科学都市が持っているドルやユーロを一気に日本円にしちゃいましょう。」

「・・・それをする、最悪1ドル50円台まで行ってしまい、科学都市の輸出が、壊滅的な打撃を受けます。また、世界各国が為替介入しても回復までは、かなり時間がかかってしまいますので、あまり、お勧めできません」

「じゃあ、そういう風に政府に言って。というわけで、解散！」

皆が、さっそく席を立とうとしていた時だ。

「お待ちください、さらなる問題が発生しました。」

黒ずくめの人が、発言した。

「えっと、あなたって、誰だっけ？」

本気で思いだせない様子の美鈴。

「失礼ですよ、杉田さん。まあ、私も知りませんがね」

藤本が発言した。

「覚えておきましょうよ、ひとの名前ぐらい。あの人は、宮岡さんですよ。」

中崎が答えるが、だれも興味を示さない。

「そんなことよりも、問題とは、？」

本題に戻そうとする秋。

「はい、実は、今日正午、SCF-554戦闘機が墜落しました。」
「なんで？」

「原因は、DDoS攻撃です。」

「DDoS攻撃？セキュリティ部門全員解雇しちゃうか？」

「今、全員解雇すると誰が『ジョセフィーヌ』を監督するんですか？」

「ぶふ、『ジョセフィーヌ』だって、傑作」

「あなたがつけたんでしょ！こんな名前を擬似人工智能につける科学者は、あなた以外いません！」

本気でキレている秋。

「まあまあ、落ち着いて。で、どうしてそんな攻撃を受けたのかなあ？」

「いちおう、こういう場合にも対応できるほどのサーバーは、用意していたのですが、世界中にある端末の30倍の数が一斉にクラッシュキングを仕掛けてきたと、記録されています。」

「世界中にある端末の30倍？どうやってそんなことをするのですか？」

「個々の処理能力を限界まで釣り上げ、同時接続した場合、最大で、90、6倍ほどのアクセスが可能です」

「それは、世界中で、か？」

「はい」

「だが、それは、世界中にある端末の約3割をフルに活用しなければならぬ。しかも、世界中にある端末のうち8割が、科学都市の管理下にあります。科学都市の管理下にある端末のセキュリティは、どんな下位端末にも、量子暗号化技術は、最低限使用されている。だから、これを実行に移すのは、ほぼ、不可能に近いのでは？」

「じゃが、量子暗号化技術は、『ジョセフィーヌ』だったら、たったの5秒で解読されてしまうんじゃないぞ？そんなことも知らんのんか」「だまれ、無知なくそじじいが」

量子暗号化技術が広まったとしても、演算機器の性能が上がれば、

すぐに解読されてしまうため、通常、100万分の1秒置きに、再暗号化を行っている。このことを知らない、頭の古い驚頭は、当然、怒った。

「なんじゃと！」

「まあ、バカは、ほつといて、さつさと、すすめましょ？」

「そうですね。仮に実行できるとしたら、仮想演算機器、まだ、仮説上の存在ですが、理論上、無限の並列処理ができるコンピューターがあります。」

仮想演算機器とは、量子コンピューターの延長線上のようなもので、光子を利用し、受光器の限界光子判断値を仮想的に無限とすることによって、ほぼ、無限と呼べる並列演算を実現するのだが、量子コンピューターだけで、研究費合計4000兆円もかかってしまったという逸話まで存在するほど、時間と途方もない研究費をかけて、ようやく完成するものなのだ。

「この都市が実現していないじゃ、どこも実現できないわよ。外じゃ、量子コンピューターすら、開発されてないじゃない？」

「そうですね。ですが、危惧すべきは、『矢野下組』と『アブソリユーブグループ』ですかね」

「『アブソリユーブグループ』は、今、世界で2番目の経済成長率を誇るグループですからね。そう言えば、杉田さんの夫の祖父が『アブソリユーブグループ』の会長ではなかったですか？」

「そうだが、あの人は、嫌いだ。はつきり言って、早く死んで、私に遺産を分けてほしい」

「そうですか。では、自殺に見せかけて殺害しますか？私の私設部隊にそういうのが得意なのがいいますが。毎秒3億で貸し出しましょうか？もちろん、ユーロで。」

「いや、いい、中崎の部隊は、優秀だが、金がかかるからな。遺産を食いつぶされちゃたららんからな」

「あの、話、それてませんか？」

「そうだった。で、戦闘機が墜落した場所は、どこだ？」

「科学都市第16地区の395交差点です。銃狩り部隊《ガンハンター》が、浄水施設に侵入した男を捕まえるために向かったのですが、そこに運悪く。生き残りは、おらず、周辺の監視システムもすべてダメになりました。」

「すべて？」

「はい、滞空監視システム《スカイ アイ》、および、超音波感知式立体観測システムまで、すべて、全滅です。」

「ということは、現場では、核爆発が起こったか、はたまた、人為的な工作か・・・」

滞空監視システム《スカイ アイ》は、ナノデバイスの一つで、非常に軽量のため、一瞬でとてつもない衝撃が加えられるか、太陽の中心部に匹敵するような高温に長時間さらされない限り壊れることはない。そのため、美鈴は、可能性の問題として、核爆発か人為的な工作化の二つを選んだわけだが。

「後者は、あり得ませんね。滞空監視システム《スカイ アイ》は、現在、最高の暗号化技術、解読不能《クライム》を、使用しておりますから、何年経とうが、決して解かれることは、ありません」

「自分の研究を過信しすぎじゃないかしら？」

「それだけ、自信があるということです。」

「それを過信っていうことを覚えましょうか？」

自信満々に答える藤本に笑顔で見下す美鈴。

「で、その男は、どこに行ったのかな？」

「現在、行方を追っております。」

「はあ、じゃあ、話すことなんてないじゃん。無駄無駄、解さーん」
「だるそうに、言って、ひと倍速く、会議室を後にした。」

「・・・めんどくさい上司です。」

「そんなこと、言わない方がいいかもね」

独り言が、秋に聞こえていたといまさらながら、気がつく黒ずくめ。

「それでは、」

最後に、中崎が、でていき、会議室は、黒ずくめ一人だけとなった。

「・・・こんなことから、簡単に事件がおこってしまうんです。自分たちのシステムを過信しすぎるっていうのは、統括理事会の共通点なのでしょいか？」

そう言って、理事長席のイスの裏側につけてあった、おそらく、盗聴器と思われるものを手にとって、はあ、と、ため息をつき、黒ずくめも会議室を出た。

★☆☆☆☆

「香奈枝ってどこに行ったんだらうな」

「さあ？調べに行けば？恋人なんだし」

ソファーに寝そべり、ダラダラと放課後を満喫している生徒会役員。

「面倒なことしてないといいけど・・・」

「ま、香奈枝のことだから、復讐しにいったか、取り返しに行つて、砂川を殺してくるか、どっちかだろうねえ」

適当に、だべりながら過ごす。だが、その平穩は、突如奪われた。

「あ、携帯！」

「おれも」

同時に携帯がかかってきた。どうやら、朱音にも架かってきたみたいだが、でる様子がない。

「もしもし？」

非通知設定にされていたので、いちおう、言っておく。

「誰も出ないじゃん」

美月が怒ったように言う。守にかかってきたのも、返事は、なかった。

「なんだったんだ？」

ふと、携帯を閉じると、今度は、香奈枝が、生徒会室に飛び込ん

できた。

「みんな！逃げて！」

「・・・はぁ？何言ってるんだ？」

「良いから早く、C4仕掛けてきたから、職員室に近づかないでね☆」

「最後に、☆マークが見え隠れしたような気がしたが？」

「細かいことは、気にしないで。いつも、美月が言ってるでしょ」

「うーん、そんなこと言った覚えは・・・」

「そこ、嘘付くな」

そのとき、下から、爆発音が聞こえてきた。

「やった。成功！」

「逃げる必要なかったんだ・・・」

「後は、砂川の家をICBMでふっ飛ばせば・・・」

「物騒なこと言うな！いちおう、あれでも、国語科の教師なんだぞ？」

「私のセーブデータを消した罪は、死か、永遠の苦しみ以外では、償いきれないほど重たいもののなの」

「ひでえよ、たかがセーブデータで、殺される砂川がかわいそうになってきた」

砂川に明日がこなかったら、香奈枝を通報しようと、心に固く誓う守だった。

★★★☆☆

科学都市第3中央空港に作業服の男の姿があった。

「はい、ちゃんと天然痘と、XDR-TBを上水に流しました。はい、後は、発症を待っただけです。現在の予想感染者は、約80万人です。はい、分かりました。空港であいましょう」

携帯を閉じ、男は、空港のターミナルへと向かう。天然痘は、1980年に撲滅されたため、今では、耐性を持つ人間は少ない。ま

た、超多剤耐性結核菌XDR-TBは、感染すれば、ほとんどの薬が効かないという、とてつもなく、厄介なものだ。天然痘のワクチンを全国民分保管している国は、アメリカのみ。科学都市も例外なく、ワクチンを保有していない。超多剤耐性結核菌XDR-TBは、そもそも、現在ある薬では、治せない。バイオテロを起こすのには、申し分のない材料だ。

「あ、こっちです。中谷さん！」

そう言うと、物静か気な青年がこちらに来た。

「あなたが、今回の、作業員ですか？」

「はい、すでに流したので、ここの水は、飲まないようにしてください。」

そのときだ。突然、彼らの周りに、全身装甲の完全武装集団が現れた。

「まだ懲りてねえのか？おまえらも殺すぞ？」

作業服の男の口調は、中谷と話していた時よりいくらか乱暴になった。

「はあ、すいません。すぐ処理しますんで」

「気を付けてください。やつらの中には、対隔壁用500ミリショットガンを持っている人たちがいますので」

「分かりました。」

そう言うと、作業服の背中から、とてつもなく長い刀を取り出した。

「は、一気にかたをつけてやる。この破絶刀「覇壊」で壊されることを光栄に思え！」

男が、縦に刀を振り下ろすと、その先から放射状に衝撃波が伝わった。全身装甲の集団でも軽く吹き飛ばされ、装甲ごと砕かれ、一瞬で絶命する。

周りにいた、一般客もそれに巻き込まれ、あたりに、鮮血が舞う。「まだやるかあ？」

叫ぶと、今度は、全身装甲の集団は、まだ、避難していない一般

客がいるにもかかわらず、一斉に対隔壁用500ミリショットガン
を放った。対隔壁用500ミリショットガンは、美鈴が遊び半分で
作った代物だったが、無駄に威力が高く、装甲車両をたったの一発
で、粉碎し、塵も残さぬほどだった。それを、空港のターミナルで
使えば、どうなるか、容易に想像できる。当然、作業服の男と中谷
は、他の一般客とともに、跡形もなく粉碎され、ターミナルには、
大穴があくだろう。

だが、その予想は、裏切られた。

「ひやは、この程度か。おまえらが、この俺に立ち向かおうとする
など、一般人が核弾頭を素手で受け止めようとするのと同じだと、
どうして気がつかないのかなあ？」

男は、破絶刀「覇壊」、射出された弾丸をひとつ残らず、破壊し
た。

衝撃波によって、動けるものは、誰もいなかった。みな、着てい
た装甲は、粉々となり、人間の形を保っている物の方が少ない。

「すいません。では、まいりましょうか。我らの教祖、天界の覇者
《おりは こうき》のもとへ」

男は、さつきとうってかわり、笑顔で聞いた。

「そうですね。早くでないと、いつ感染するか分かったもんじゃあ
りませんから」

中谷がそう答えると、男は、中谷の斜め後ろに立ち、中谷が歩く
後ろについて行った。

ターミナルの出口に來ると、さらなる、警備隊がいたが、こちら
も、刀ひと振り、文字通り粉碎されてしまった。

彼らは、向かってくる敵を蹴散らし、特殊車両を借りて、科学都
市外周部へと向かって行った。立ち去った後には、肉片と粉々に碎
けた物と、血のにおいだけが残っていた・・・。

新たなる危機（後書き）

第2章の始まりです。遅くなつてすいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0419y/>

科学と魔術と悪名高い生徒会

2011年11月6日05時27分発行